禁帯出

宮城町文化財調査報告書第４集

蒲沢山遺跡

遺跡詳細分布調査

（昭和58年度）

昭和59年３月

仙台市教育委員会文化財課

宮城町教育委員会

正　誤　表

番号	ページ	行・図	誤	正
1	P 1	27行	貫薬山丘陵	背薬山丘陵
2	P 2	第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡 20 19 21	20 19 21
3	P 4	第2図	遺跡地形図および調査区域 スケール 0 50 100	
4	P 6	9行 第3図	10 13 17	10 13 16 17
5	P13	7行	第Ⅶ～Ⅺ類として	第Ⅶ～Ⅺ類とした
6	P16		土器実測図スケール 0 5 10	
7	P19	20行	成形 知冊	整形 短冊
8	P26	2行	南西端	西南端
9	P33		出土遺物拓本土器（3） No38 No39 No45 No46	 No39 No38 No46 No45
10	P37		出土遺物石器（4） No49 No50 No51 No52 No53 No54	 No51 No49 No54 天地逆 天地逆 No50

序

わが宮城町は県の中央西部に位置し、町の北西部には船形山を中心とする奥羽の秀峰が聳え，中央部には東に向って広瀬川の清流が流れています。このように緑と水の自然に恵ぐまれたわが町は，一方では都市化が進み大きく発展しています。

近年，当町も他の開発の進んでいる町と同じように開発と埋蔵文化財の保護との調和が一つの課題となっております。現在、宮城県遺跡地名表(昭和56年２月)によれば町内に点在している遺跡は132個所が確認されており，今回発掘調査を実施した〝蒲沢山遺跡〟もそのなかの一つであります。

調査の結果によりますと，この遺跡からは縄文早期末から前期の住居跡と多くの石器などの遺物が出土しました。この時代の住居跡がこのように纏って検出された点では県内でも数少い部に入るものと考えられます。また石器につきましては精巧な石鏃，石槍などが多数出土しております。

文化財は元来私たちの祖先が創造した文化であり，現在残されている数少いものであります。そのどれもが固有の価値をもっているものであり，私たちは祖先が残したこの貴重な文化遺産を子孫に継承していく義務があると考えるものであります。この報告書が広く活用され，埋蔵文化財に対しての関心がいっそう深まることを期待しております。

最後に，本年は例年にない悪天候のため，調査は困難をきわめ，発掘調査に当った方々に格別のご苦労を煩わしました。また報告書作成に多大のご指導・ご協力を頂きました方々に心からの感謝の意を表し，ご挨拶といたします。

昭和59年３月

宮城町教育委員会
教育長　**田　中　勝　三**

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 3
Ⅳ　調査の成果 …… 5
　1　基本層位 …… 5
　2　発見された遺構と遺物 …… 5
　　(1)　遺構とその出土遺物 …… 6
　　(2)　出土遺物 …… 9
　　①　縄文土器 …… 9
　　②　弥生土器 …… 12
　　③　石　　器 …… 18
Ⅴ　まとめ …… 26

例　　言

1.　本報告書は，昭和58年度文化庁国庫補助事業として実施した蒲沢山遺跡の遺跡詳細分布調査報告である。

2.　遺跡の所在地　宮城県宮城郡宮城町芋沢字蒲沢山

3.　調査主体者　宮城町教育委員会

4.　調査協力　赤坂土地区画整理組合準備委員会

5.　調査担当　宮城町教育委員会社会教育課

6.　調査期日　昭和58年８月19日～昭和58年10月31日

7.　調査面積　調査対象面積70,000㎡　　調査面積17,800㎡

9.　本報告書の編集・執筆は，宮城町教育委員会社会教育課が行った。

10.　本遺跡の調査，整理に関する記録，出土遺物は，宮城町教育委員会が保管している。

Ⅰ　調査に至る経過

宮城町教育委員会は，宮城町赤坂土地区画整理事業に係る蒲沢山遺跡（宮城県遺跡地名表番号21132）の遺跡詳細分布調査を昭和58年度国庫補助事業として実施した。

調査は，区画整理事業を実施するに当たり当該遺跡の保護を図るため協議資料を得ることを目的とした。

昭和55年５月30日，宮城町教育委員会及び宮城町赤坂土地区画整理組合準備委員会は，宮城県教育庁文化財保護課より当該事業に先立つ詳細分布調査の必要があるとの指導を受けた。

これを踏まえて，町教育委員会及び宮城町は昭和56年・57年，県教育庁文化財保護課より調査方法等について指導を受け，さらに当該準備委員会と協議を重ねた。その結果，町当局は当該調査の実施を国及び県の補助事業として検討することとした。

昭和57年10月，国及び県に補助事業計画を提出し，昭和58年４月19日，町当局は補助金交付申請を行った。

当該補助事業は昭和58年４月20日に発掘届を提出し，翌年３月22日，宮城町文化財調査報告書第４集を刊行し終了した。

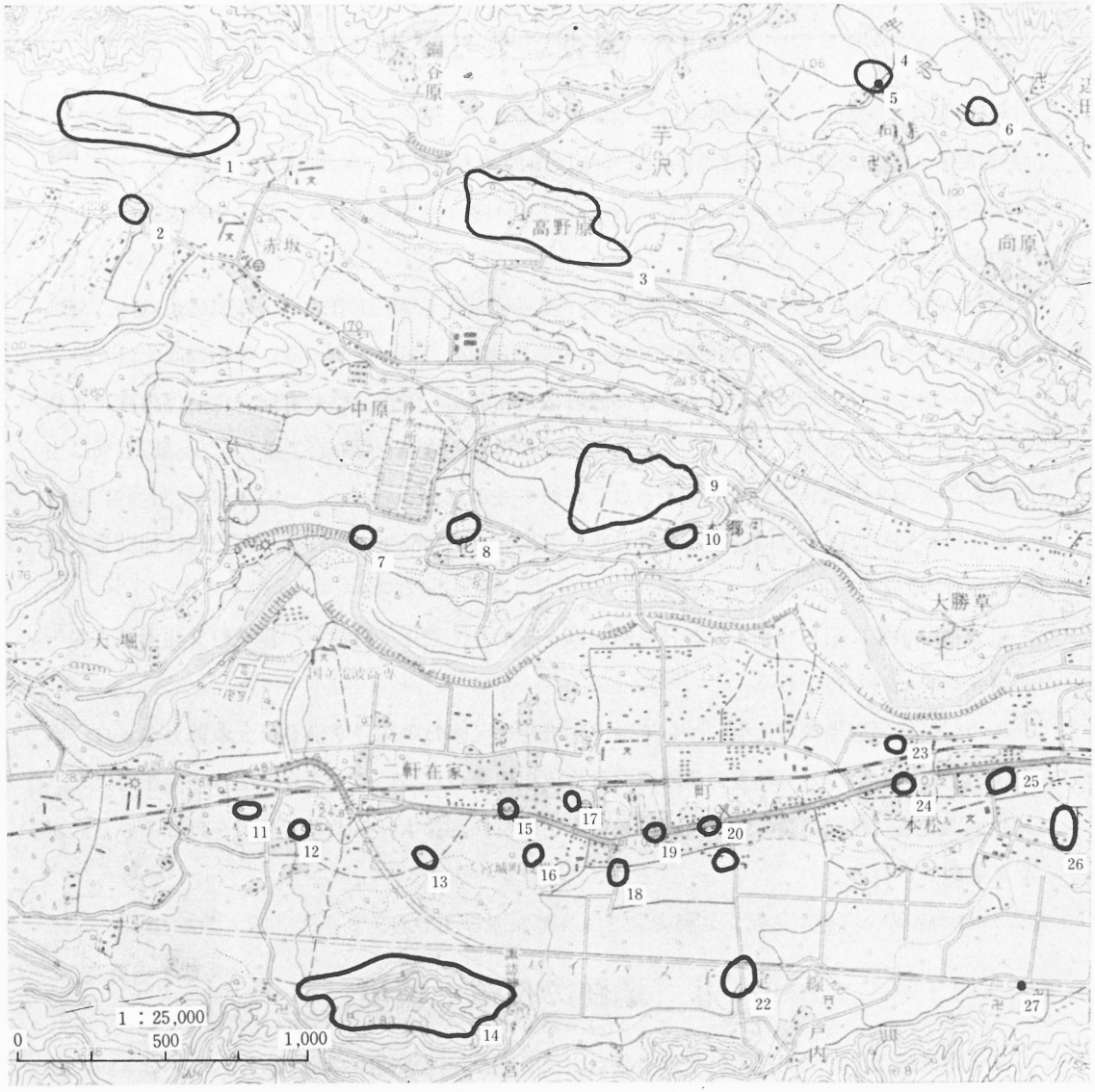
この間発掘調査用機材置場については，赤坂土地区画整理組合準備委員会の協力により，事務所の１室をお借りし，調査の前段階の伐採伐根作業等についても便宜を図っていただいた。又発掘調査及び整理作業の際，宮城県教育庁文化財保護課より多大なご教示をいただいた。記して感謝したい。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

蒲沢山遺跡は，宮城郡宮城町芋沢字蒲沢山に所在し，国鉄仙山線愛子駅から北へ2.5kmの地点，みやぎ台ニュータウンに通じる町道(赤坂・明神線)の西側に位置している。

宮城県中央部には，西側の奥羽山脈から派生した丘陵地が発達している。この丘陵地は陸前丘陵とよばれ，北から七北田川，広瀬川，名取川の３河川が東流し，それぞれ中流域に河岸段丘を形成している。これら３河川によって開析をうけた丘陵地には，それぞれに名称がつけられており，広瀬川をはさんで大きく２つに分けられている。七北田川ー広瀬川間の丘陵地は，七北田丘陵（七北田川右岸）と国見丘陵（広瀬川左岸，国見・大石原一帯）とよばれ，広瀬川ー名取川間の丘陵地は，責葉山丘陵と蕃山丘陵（青葉山丘陵の西方，西風蕃山，折立，茂庭）とよばれている。

宮城町はこの２大丘陵の間にひろがる愛子盆地に位置している。盆地のほぼ中央を広瀬川が



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	**蒲沢山遺跡**	縄文（早・前）	15	蛇台原B遺跡	縄文
2	赤坂遺跡	縄文	16	榎遺跡	奈良・平安
3	高野原遺跡	縄文	17	樋田遺跡	縄文・奈良・平安
4	原館跡	中世・近世	18	上町A遺跡	奈良・平安
5	正安・嘉元の碑	中世	19	上町B遺跡	奈良・平安
6	馬場城跡	中世・近世	20	補陀寺跡	近世
7	中原遺跡	縄文	21	観音A遺跡	奈良・平安
8	花坂遺跡	縄文	22	南館跡	近世
9	本郷館跡	近世	23	想海塚跡	近世
10	本郷遺跡	縄文	24	二本松A遺跡	縄文・奈良・平安
11	雷神B遺跡	奈良・平安	25	棟林C遺跡	縄文・奈良・平安
12	堰内遺跡	縄文	26	棟林B遺跡	奈良・平安
13	陀台原A遺跡	奈良・平安	27	弥勒寺の元享の碑	中世
14	御殿館跡	中世			

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

東流している。広瀬川には，熊ケ根付近で大倉川，落合付近で芋沢川が合流し，それぞれに河岸段丘を形成している。蒲沢山遺跡は，七北田・国見丘陵の西南端を流れる芋沢川の支流・赤坂川沿に位置している。遺跡の所在する丘陵は，東から入り込んだ谷によって分けられており，今回調査したのは南側の丘陵である。頂部の標高は230 mほどで，赤坂川からの比高差は40～50mほどである。現状は山林となっている。

宮城町の遺跡数は，現在包含地88，城館17，神社，番所跡，廃寺，板碑，塚など計132遺跡が確認されている。特に，縄文時代の遺跡は広瀬川・芋沢川と，これらの支流沿いに発達した段丘上や丘陵上に数多く立地している。蒲沢山遺跡の立地する広瀬川左岸には，高野原遺跡，赤坂遺跡，中原遺跡，花坂遺跡といった縄文の遺跡が知られている。

Ⅲ　調査の方法および経過

今回の調査は区画整理事業計画区域内の赤坂川左岸丘陵全域を対象とした。

(1)　調査地区の設定

本遺跡が存在する丘陵は開発計画区域内に面積約70,000㎡に達する平坦面を有し，ほぼ東西方向に長軸をもつ。

そこで東西方向と南北方向を軸線として，対象地区全体に50m単位で大グリッドを組み，さらにその中を2m単位で小グリッドを組んだ。

大グリッド名は南北軸を南から算用数字で，東西軸を東から大文字のアルファベットで表示し，小グリッド名は南北軸を算用数字で，東西軸を小文字のアルファベットで同様に表示した（例・K８－１a)。

また調査地区を便宜上3地区に分け，丘陵中央の全面剝離地区の西側を西区，全面剝離地区を中央区，その東側を東区とした。

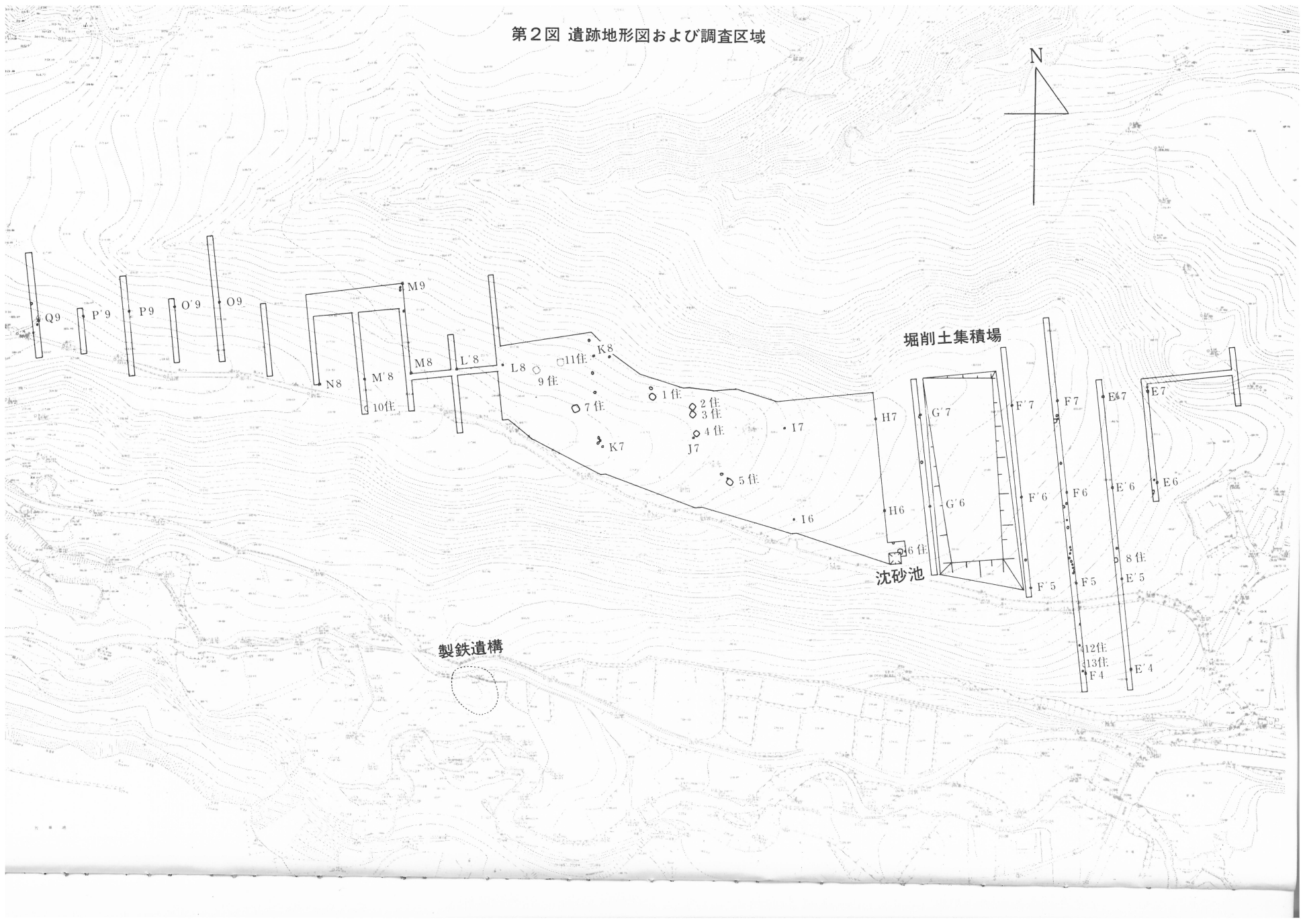
西区は面積約15,000㎡の平坦面を有する。この地区は南北方向の幅3mのトレンチを25m間隔で10ケ所設定した。さらに丘陵頂部に東西方向の幅3m，長さ50mのトレンチを1ケ所設定した。又西区の丘陵北側下端で弥生時代の土器片を表採することができた地点は面積約600㎡を全面剝離した。この地区を以後弥生土器表採地区とよぶ。西区の発掘面積は2,200㎡である。

中央区は面積約20,000㎡の平坦面を有し，全面剝離した。発掘面積は13,000㎡である。

東区は面積約30,000㎡の平坦面を有し，西区と同様に南北方向の巾3mのトレンチを25m間隔で6ケ所，丘陵裾部に50m間隔で1ケ所，さらに東西方向の巾3mのトレンチを設定した。発掘面積は2,600㎡である。

調査対象面積は，総計約70,000㎡，発掘面積は17,800㎡である。

第２図 遺跡地形図および調査区域



(2) 調査の方法

伐採伐根作業は，区画整理事業工程の一環として実施された。

調査の方法は重機により，表土を剝離し，人力による遺物及び遺構の検出作業を行い，遺構の形状，遺物の出土状況等を記録した。遺物の取上げ方法は，石器及び土器については出土地点を記録し，その他の剝片類については小グリッドごとに一括して取り上げた。

(3) 調査の経過

調査の前段の伐採伐根作業は７月15日から８月13日まで約４週間を要した。

発掘調査は８月19日から開始し，10月31日に終了し，約２ケ月半を要した。以下調査経過を列記する。

８月19日～９月13日　（表土剝離及び遺構確認作業）
９月10日～９月29日　（グリッド設定作業）
９月25日～10月22日　（遺物取上作業及び写真撮影，出土地点の記録）
10月３日～10月15日　（遺構検出作業及び写真撮影，形状等の記録）
10月21・22日　（遺構埋戻し作業）
10月24～10月26日　（ローム層を掘り下げ，写真撮影及び地層図の作成）
10月27～10月31日　（機材撤収等）

この調査の結果，西区，中央区，東区いずれの地区においても，住居址，土壙，ピット等の多くの遺構や遺物が検出された。西区の弥生土器表採地区においては遺構は検出されなかった。又赤坂川左岸において鉄滓を表採することができた。これらの遺構，遺物等の内容については後述する。

Ⅵ 調　査　成　果

1 基本層位

調査区の基本層位は４層確認された。第Ⅰ層は表土層である。第Ⅱ層は黒褐色土層である。第Ⅲ層はローム漸移層となり，第Ⅳ層が地山面（ローム層）である。各層の分布をみると，Ⅰ層は10～25cmの厚さで全域にみられるが，Ⅱ層は西にいくほど薄くなり，H区付近で消えてしまう。Ⅲ層は10～30cmの厚さで全域にみられる。遺構と遺物のほとんどは，Ⅳ層地山面で発見されている。

2 発見された遺構と遺物

(1) 遺構とその出土遺物

① 住 居 址

中央区南側緩斜面を中心として，1号址～13号址まで確認されており，8号址をのぞいてはいずれも地山面で検出されている。1号址～7号址をのぞいては，プランの一部が調査区外にかかるなどしてはっきりしなかった。

— 1号住居址 —

（平面形）J7－12j～13j区，J7－12k～14k区にかかる地山面で検出された。370×330cmの規模を有し，不整方形のプランを呈する。

（出土遺物） 第3図10，13，17

土器片は，縄文の施文された胴部片を中心として8点出土している。口縁部上端に刻目をもち，Rℓの撚り糸の押圧と沈線による区画が施されたもの（10）や，Rℓの撚り糸が施文されたもの（13）がある。石器類は剥片のみで，使用痕のみとめられる剥片が2点出土している。(17)

— 2号住居址 —

（平面形）J7－8a～10a区，I7－8y～10y区にかかる地山面で検出された。380×330cmの規模を有し，不整方形のプランを呈する。プラン南側で3号址と重複する可能性もある。

（出土遺物） 第3図12，15，18，20

土器片は，縄文の施文された胴部片を中心として9点出土している。胎土に繊維を含み，LRの縄文が施文されたもの（12）や，繊維を含まないもの（15）がある。石器類は，基部½を欠いた石鏃（20）と，先端部を欠く石槍（18）が出土している。

— 3号住居址 —

（平面形）J7－7a・8a区，I6－7y・8y区にかかる地山面で検出された。370×340cmの規模を有し，不整方形のプランを呈する。プラン北側で2号址と重複する可能性もある。

（出土遺物） 第3図19

土器片は出土していないが，使用痕のみとめられる剥片が3点出土している。

— 4号住居址 —

（平面形）J7－2a区，I7－1y・2y区，I7－2x区にかかる地山面で検出された。330×280cmの規模を有し，不整方形のプランを呈する。

（出土遺物） 第3図14，21

土器片は，縄文の施文された胴部片（14）のほか，無文土器が2点出土している。石器類は剥片のみで，使用痕のみとめられる剥片（21）がある。

— 5号住居址 —

（平面形）I6－12r・13r区，I6－12q・13q区，I6－12p区にかかる地山面で検出された。340

×340cmの規模を有し，偶丸方形のプランを呈する。プラン北側に100×110cmの規模をもつ土壙を伴っている。

（出土遺物）　第３図１～３，６，８，11

土器片は，いわゆる羽状縄文系土器を中心として25点出土している。口唇部に棒状工具による刻目をもち，地文に縄文が施文されるもの（１～３）や，胎土に繊維を含み，節の太い原体（６㎜）で羽状縄文がつけられたもの（６）がある。石器類は剥片のみである。

― ６号住居址 ―

（平面形）Ｈ５区内に沈砂池を掘削中に焼土を検出したもので，南側部分½程を欠いている。推定350×270cmの規模を有し，長方のプランを呈していたとおもわれる。

（出土遺物）　図３図９・22・23

土器片は，縄文の施文された胴部片を中心として29点出土している。（９）はRℓの撚り糸を施文したものである。石器類は，石鏃（23）と，使用痕のみとめられる剥片（22）が出土している。

― ７号住居址 ―

（平面形）Ｋ７－10f～12f区，Ｋ７－10g～12g区，Ｋ７－11h区にかかる地山面で検出されたもので，440×360cmの規模を有し，不整方形のプランを呈する。プラン北側に40×50cmの範囲で焼土を伴っている。

（出土遺物）　第３図４，５，７，24

土器片は，縄文の施文された胴部片を中心として24点出土している。口唇部に原体による刻目をいれ，同じ原体による地文をもつもの（４）や，羽状縄文を地文にもち，口縁部上端に刻目をもつもの（５）がある。石器類は剥片のみであるが，頁岩の大型のフレイク（24）が出土している。

― ８号住居址 ―

Ｅ′トレンチにおいて，プラン東側部分をⅢ層上面で検出したもので，推定320×320cmの規模を有し，隅丸方形のプランを呈するとおもわれる。

― ９号住居址 ―

ローム層のグリッド調査中，焼土を伴う落ち込みを検出したもので，Ｋ７－25n区25o区，Ｋ７24n，24o区にかかっている。平面プランは未確認である。

― 10号住居址 ―

Ｍ′トレンチ南側，地山面で集石に伴って一括個体（第７図45，46）が出土したもので、平面プランは未確認である。

― 11号住居址 ―

ローム層のグリッド調査中検出したもので，K7 ―25j・25k区にかかっている。羽状縄文土器・石匙・スクレイパー等の剝片石器が集中出土している。平面プランは未確認である。

― 12号・13号住居址 ―

Fトレンチ南側斜面に検出された。羽状縄文土器を出土している。平面プランは未確認である。

② 土壙およびピット

土壙およびピットは総数70基検出されたが，確認面において調査を終了したため，掘り込み等の構築状態は不明である。土壙とピットの区分については，平面形と規模の面から，100×100cmを超えるものについては土壙とし，それ以下のものをピットとして分類している。

（ピット）

ピットは総計36基検出され，そのうち30基が，調査地区南東部にあたる丘陵上で最も広い面をもつ部分（E・F・G区）に集中している。検出されたピットをみると，その径が30～50cmとなるものが17基，30cm台が13基と，全体の80％がこの中に含まれている。また平面プランでは、円形を呈するものが24基と全体の70％を占めている。

（土壙）

土壙は総計34基検出されているが，ほぼ調査区全域にわたっている。規模別でみると，長軸で100～120cmを有するものが13基，121～140cmが6基，141cm以上が6基となっている。また平面形では，円形となるもの6基，長楕円となるもの5基，不整形となるものが5基となっている。主軸方位が地形の傾斜方向に一致するものが，一致しないものの2倍強となっており，土壙の機能を考えるうえでの参考になるとおもわれる。

土壙およびピットの機能については，現時点においては不明であるが，構築された時期については，確認面における遺物の出土状況からみて，縄文早期末～前期初頭になるとおもわれる。

また，図面にはとりあげなかったものの，素掘りの炭焼跡を調査区全域に多数検出した。ほとんどがⅡ層中から掘りこまれており，直径150～200cmの規模を有し，―20～30cmのレンズ状の掘り込みをもっていた。覆土にはカーボンを大量に含み，しまりがなく，焼土は伴っていない。

③ 製鉄遺構

赤坂川左岸を表採調査中発見したもので，川岸の傾斜地（約1,000㎡）に直径30mにわたって鉄滓が分布している。確認された遺構は，水路跡だけであり，遺構の主体部は不明である。今回発見された鉄滓が，精錬滓か，鍛冶滓なのかは，今後の分析による所見をまたなければならないが，この鉄滓のほかに遺構の性格や，使用されていた時期を示すような遺物は出土していない。しかし「安永風土記」にもその記録がみあたらないことから，近世以前に使用されていたものとおもわれるが，当地における製鉄の歴史を考えるうえで貴重な遺構と考えられる。

	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
1	5住 P11	口縁 深鉢	口縁部上端に棒状工具による刻目	縄文	繊維混入・暗黄褐色	裏面に横ナデ調整
2	5住 P3	口縁 深鉢	口唇部に棒状工具による刻目	不明	繊維混入・暗黄褐色	裏面に横ナデ調整
3	5住 P7	口縁 深鉢	口唇部に棒状工具による刻目	縄文 LR	黄褐色	No 6と同一個体
4	7住（K7—10g）	口縁 深鉢	口唇部にRL原体による刻目	縄文 RL	繊維混入・暗黄褐色	
5	7住（K7—11h）	口縁 深鉢	口縁部上端に棒状工具による刻目	縄文 RL	繊維混入・明黄褐色	
6	5住 P7	胴部 深鉢		縄文 LR	暗黄褐色	No 3と同一個体
7	7住 P4	胴部 深鉢		羽状縄文LR，RL	暗褐色	撚りの異なる2本の原体使用
8	5住 P8	胴部 深鉢		羽状縄文	繊維混入・明黄褐色	節の太い（6mm）原体使用
9	6住	胴部 深鉢		撚り糸文 Rℓ	黄褐色	
10	1住 P2	口縁 深鉢	口縁部上端に刻目，撚り糸の押圧	撚り糸 Rℓ	繊維混入・暗黄褐色	
11	5住 P4	胴部 深鉢		縄文 RL	繊維混入・黄褐色	
12	2住 P3	胴部 深鉢		縄文 RL	繊維混入・暗褐色	
13	1住 P3	胴部 深鉢		撚り糸文 Rℓ	明黄褐色	
14	4住 P1	胴部 深鉢		縄文	繊維混入・赤褐色	
15	2住 P4	胴部 深鉢		縄文 LR	小砂粒を多量に含有 黄褐色	
16	1住 P5	胴部 深鉢		縄文 RL	繊維混入・明黄褐色	

土器観察表

	形態	地区・層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	備考
17	フレイク	1住	25.5	30.5	7.0	5.0	頁岩	使用痕
18	石槍	2住	27.5	24.5	5.5	2.5	珪化凝灰岩	欠損
19	フレイク	3住	36.0	12.0	4.5	2.5	頁岩	使用痕
20	石鏃	2住	14.5	12.0	2.5	0.25	頁岩	欠損
21	フレイク	4住	31.5	35.0	4.5	5.0	頁岩	使用痕
22	フレイク	6住	50.5	35.0	13.0	22.5	頁岩	使用痕
23	石鏃	6住	19.5	14.5	4.5	0.5	頁岩	
24	フレイク	7住	122.0	107.0	47.5	490.0	頁岩	

遺構出土遺物計測表

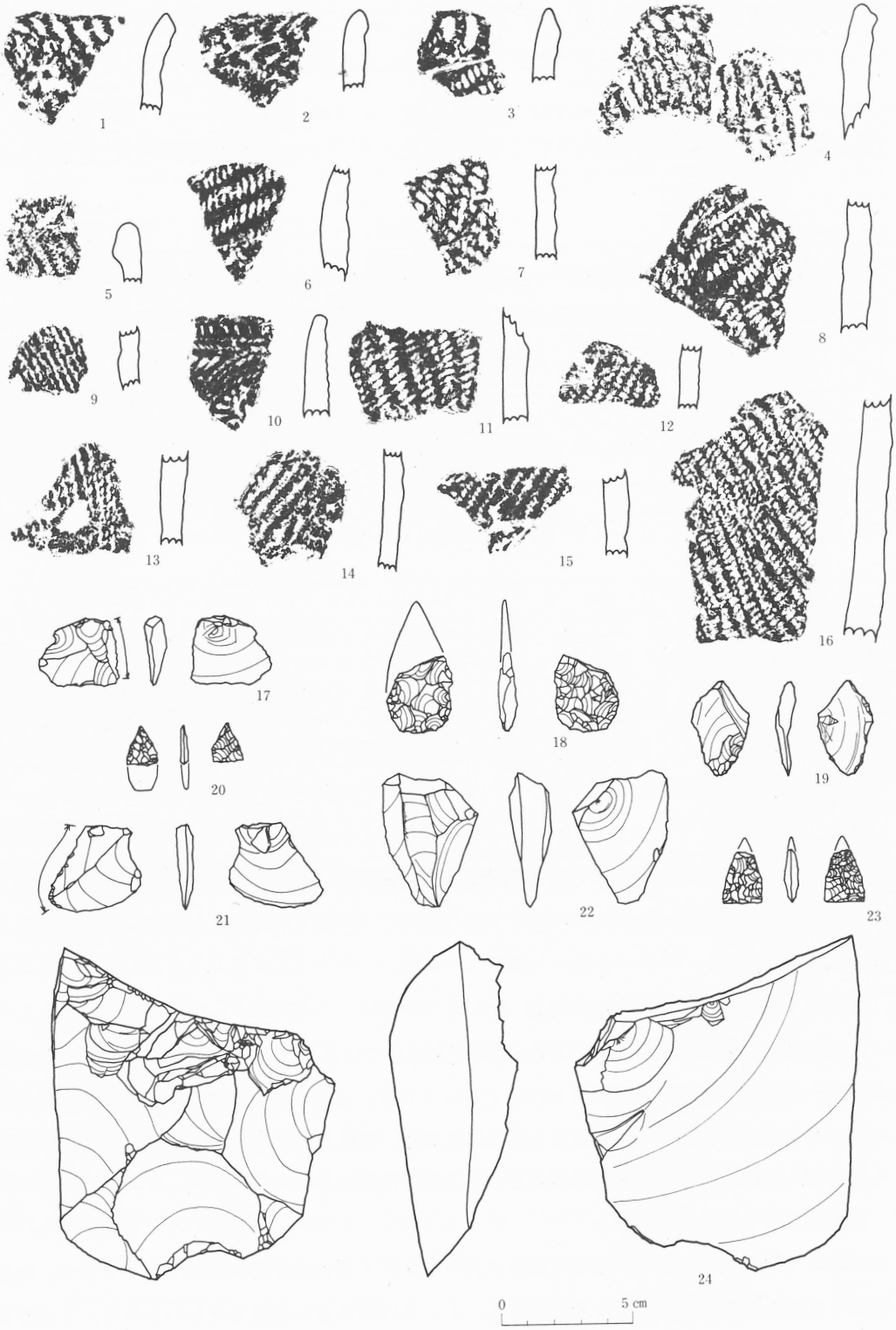
(2) 出土遺物

① 縄文土器 第4図1～第7図48

縄文土器は最も出土量が多く，総数670点が出土している。胴部資料が542点と多く，口縁部が85点，口頸部が12点，底部資料が15点となっている。これらの土器について，胎土，内外面の文様および文様要素について観察を行なった結果，第Ⅰ類～第Ⅻ類に大別された。さらに各土器群は，文様の施文部位・文様構成などによって細別された。

第Ⅰ類（第4図1～4）

いわゆる条痕文系土器で，胎土に繊維を含み（3）土器の内外面に貝殻条痕文をもつ。胴部資料のため，全体の文様構成は不明である。1，2は内外面に条痕文をもつもので，3は外面のみ条痕文をもっている。4は表裏ともにRLの縄文が施文されているものである。



第3図 住居址出土遺物

第Ⅱ類（第４図５～14，第５図16～25）

いわゆる羽状縄文系土器群とよばれるもので，胎土に繊維を含んでいるものが大半を占める。今回の調査の出土遺物のほとんどがこの中に含まれる。文様要素および施文技法によって，ａ～ｄ類に細別される。ａ）口唇部～口縁部上端に文様，ｂ）羽状縄文，ｃ）斜縄文，ｄ）撚り糸文。

Ⅱａ類（第４図５，６，８，９）

口唇部や口縁部上端に文様をもつもので，羽状縄文や撚り糸文（５）を地文としている。ヘラ状工具により，押圧されたもの（５），刻目が施されたもの（６，８，９）がある。

Ⅱｂ類（第４図７，12～14，第５図16～20）

胴部資料のみのため，全体の文様構成は不明であるが，羽状縄文が施文されたものである。同一原体によって施文されたもの（13），２種類の撚りの異なる原体によって施文されたもの（19），条の短い原体によって施文されたもの（17）があり，羽状縄文が施文されたのちに，横位の縄文が押圧されているものもある。（14）

Ⅱｃ類（第５図21～25）

胎土に繊維を含むもの（21，24，25），含まないもの（22，23）とがあり，縄文が施文されている。

Ⅱｄ類（第４図10，11）

胎土に繊維を含むもので，いずれもRℓの撚り糸文が施文されている。

第Ⅲ類（第５図15）

細い粘土紐の貼りつけにより区画され，隆帯の両側にRℓの撚り糸が押圧されているもので，１号住居址より出土した土器（第３図10）に類似する文様構成をもっている。

第Ⅳ類（第５図26）

ヘラ状工具による波形状の沈線が施文されているもので，１点しか出土していない。

第Ⅴ類（第５図28，第６図29，34）

竹管状工具によって，文様が構成されているものである。平行沈線の間に半竹状工具によってＣ字状の刺突が施されたもの（28），口縁部に竹管状工具による刺突が縦位に施されたもの（29），平行沈線が連弧状に施されたもの（34）がある。

第Ⅵ類（第５図27，第６図30～33）

文様要素および施文技法によって，ａ，ｂ類に細別される。ａ）沈線＋細い粘土紐。ｂ）沈線＋隆帯上に刻目。

Ⅵａ類（30，31）

平行する沈線の間に，細い粘土紐による波形状の貼りつけをもつものである。

Ⅵｂ類（27，32，33）

沈線によって区画され隆帯化した部分に，刻目がつけられているものである。

第Ⅶ類（第６図35）

口唇部を外反させ，口頸部にヘラ状工具によって沈線をめぐらせ，刻目を入れているもので，１点しか出土していない。

第Ⅷ類（第６図37）

口縁部資料であり，沈線と粘土紐の貼りつけによって方形の区画を作り，沈線によって隆帯化した部分にＣ字状の刺突が施されている。

第Ⅸ類（第６図38，39，第７図48）

渦巻状隆帯や把手，小突起をもつものであり，39は楕円形の口縁をもつ浅鉢となる。

第Ⅹ類（第７図40）

調整によって作りだされた隆帯によって，渦巻状に区画されている。隆帯の両側にＲℓの撚り巻が押圧されている。

第Ⅺ類（第７図41～43）

いずれも口縁部資料であり，文様要素および施文技法によって，ａ，ｂ類に細別される

Ⅺａ類（第７図41，43）

口唇部を肥厚させるか（41），外側にかえし（43），口縁部に縄文を押圧しているもの。

Ⅺｂ類（第７図42）

平縁な口縁に，棒状工具による渦巻状の沈線をもつもの。

第Ⅻ類（第７図45，46）

同一個体であり，調整によって作りだされた隆帯が胴部に一条めぐっている。地文はＲℓの撚り糸文であり，綾絡文が垂下している。

②　弥生土器（第７図49～52）

胴部の小破片を中心として出土しており，縄文が施文されている。49は「く」の字状の口頸部をもち，胴部に縄文が施文されたものである。52は沈線によって区画された横位の縄文帯をもつものである。

（考察）

第Ⅰ類～第Ⅲ類とした土器群は，縄文時代早期末～前期初頭にかけてのものとされている。

Ⅰ類は条痕文をもつ土器であり，小牛田町素山貝塚出土の土器を標式とする土器で，早期末の素山２式とされている。

Ⅱ類とした羽状縄文をもつ土器のうち，口唇部や口縁部上端に文様をもつⅡａ類は，船入島下層式に，またⅡｄ類の撚り糸が施文された土器は，それに伴出するとされている土器である

（林1965）。

Ⅱｂ類，Ⅱｃ類とした土器群は，上川名Ⅱ式～大木１式にみられるものであるが，特定することはできなかった。

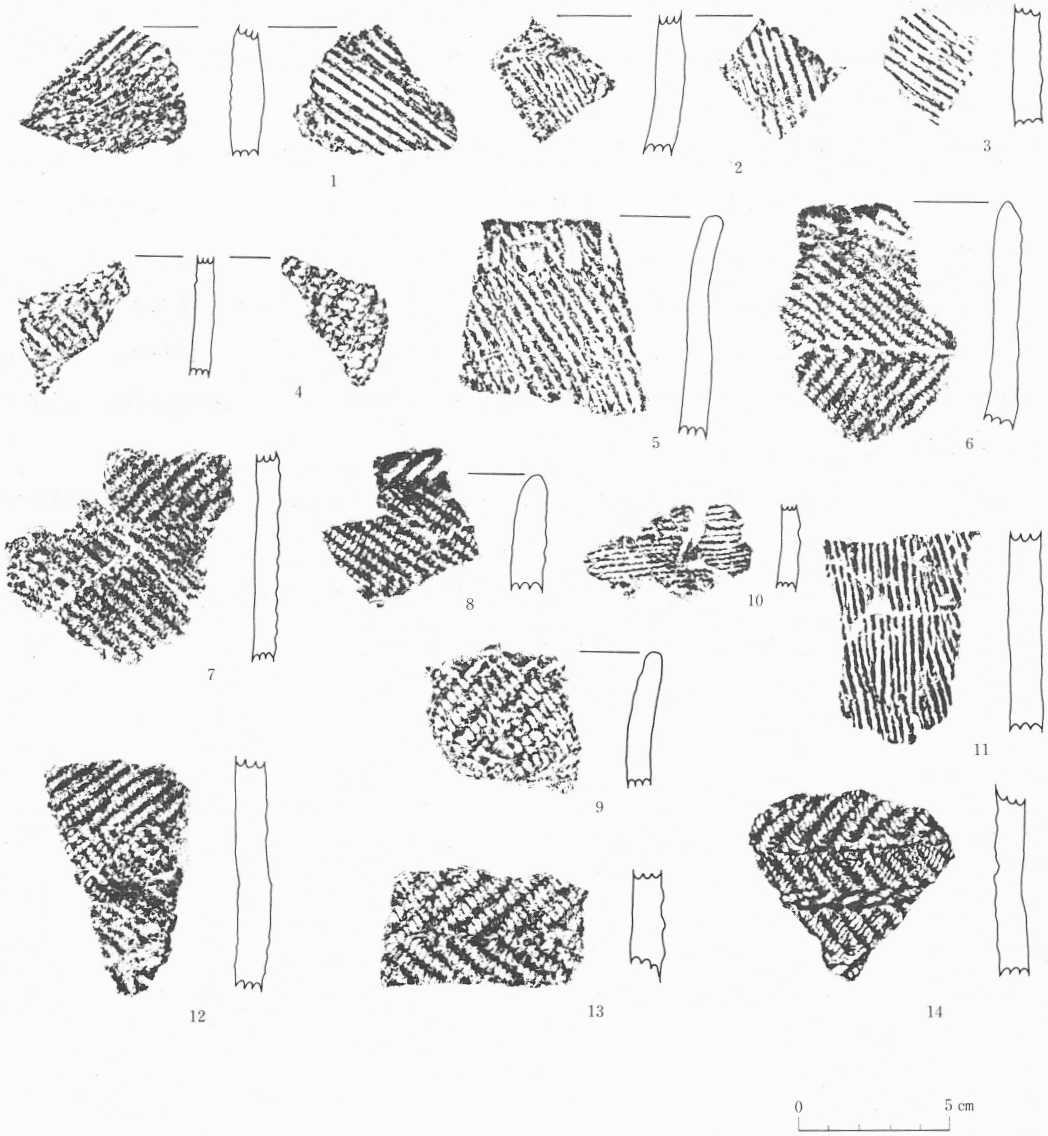
Ⅱｂ類とした第４図14，Ⅲ類とした土器群は上川名Ⅱ式になるとおもわれる。

第Ⅳ類～第Ⅵ類とした土器群は，縄文時代前期とされているもので，Ⅳ類は大木２式に，Ⅴ類は大木３式に，Ⅵ類は大木５a式にそれぞれ比定される。

第Ⅶ類～Ⅻ類として土器群は，縄文時代中期とされているもので，Ⅶ類，Ⅷ類としたものは大木７a式に，Ⅸ類～Ⅺ類とした土器群は大木８a式にそれぞれ比定される。Ⅻ類とした土器は，仙台市六反田遺跡において，大木10式～後期南境式の早い時期とされた土器群の中に，同様の土器がみられる。

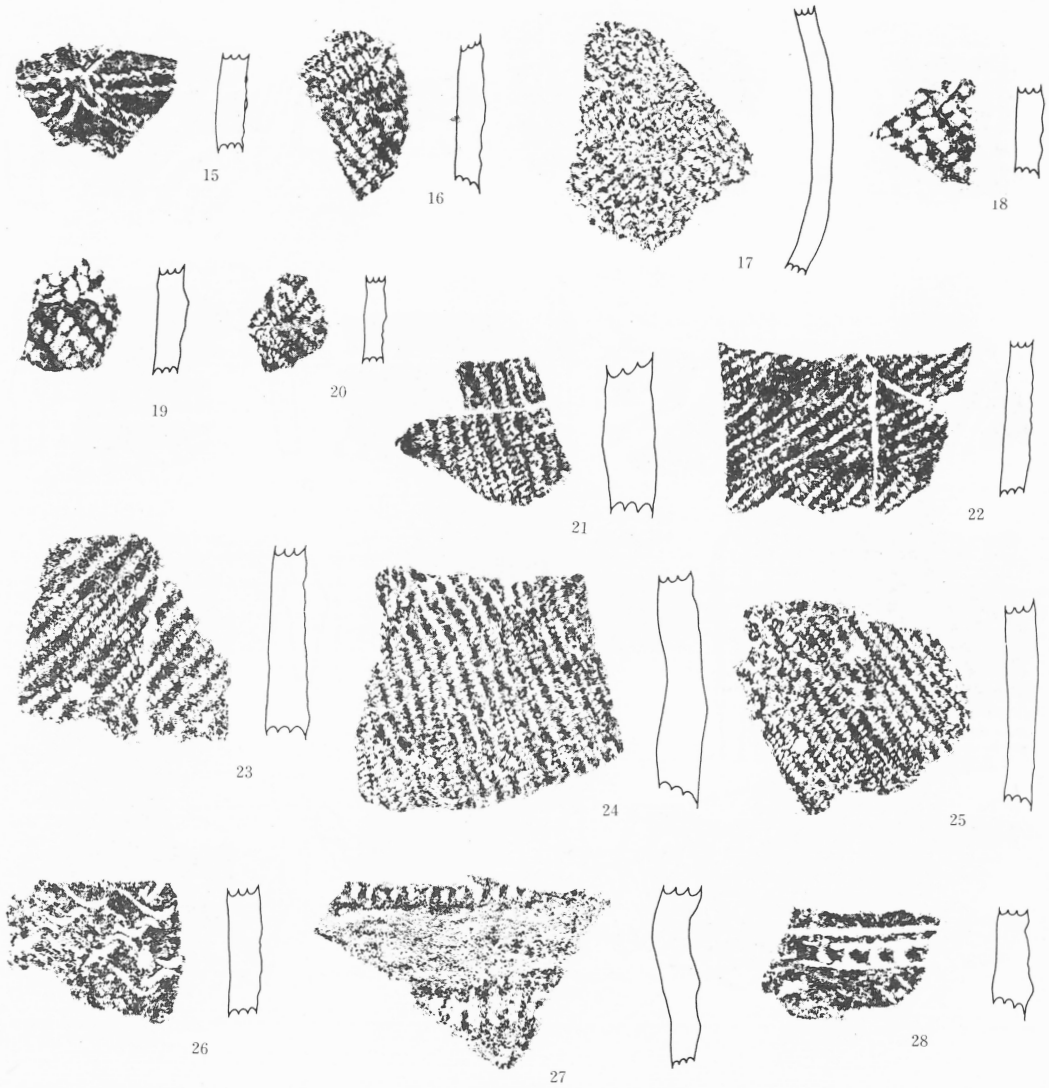
弥生土器は，文様構成や器形等が不明であるところから，どの時期にあたるものかは特定することができなかった。

また遺構に伴って出土した遺物（第３図）は，第Ⅱ類・第Ⅲ類土器群と共通の特徴をもつことから，早期末葉～前期初頭にかけてのものとされよう。



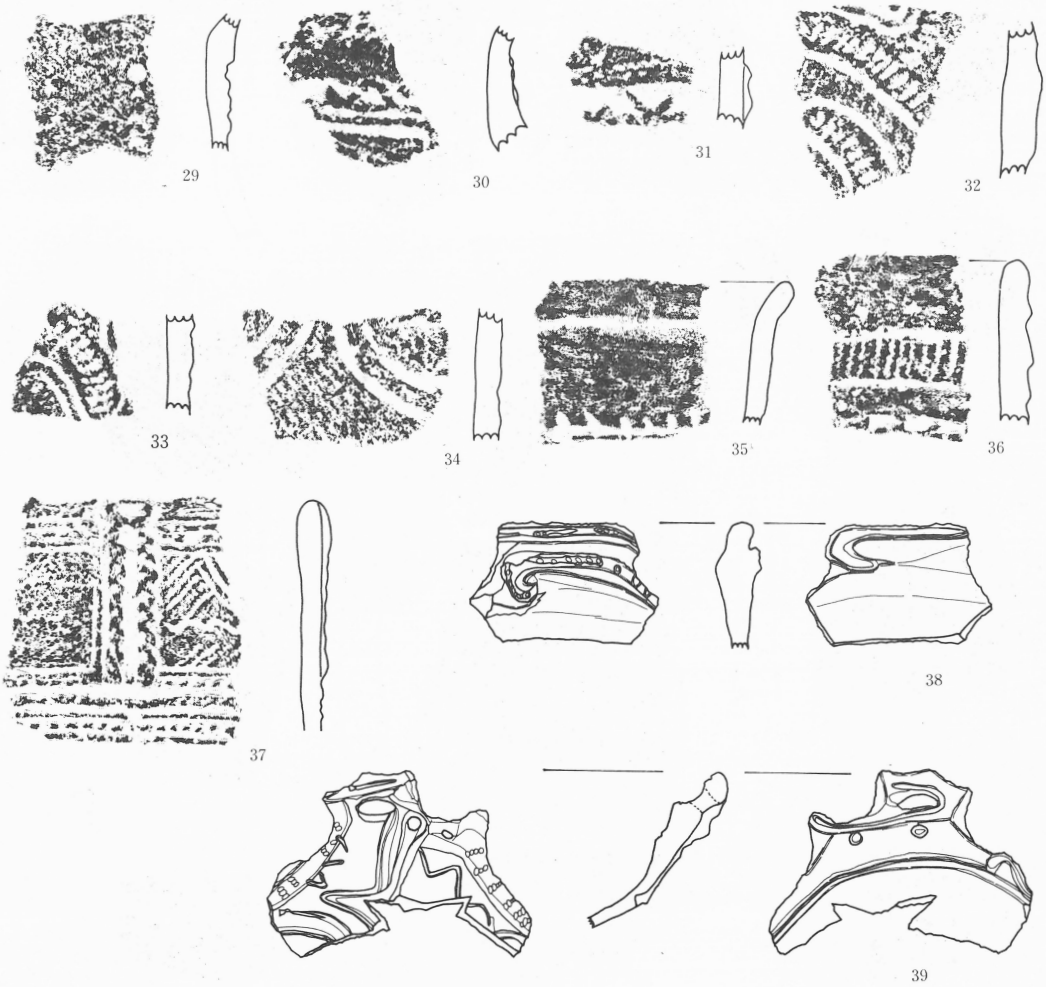
	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
1	H7	胴部　深鉢		条痕文	砂粒を多量に含有・暗褐色	
2	I6−10u	胴部　深鉢		条痕文	小砂粒を多量に含有・黄褐色	
3	J7−8i	胴部　深鉢		条痕文	繊維混入・黒褐色	
4	I7−11y	胴部　深鉢	表裏縄文	RL	繊維混入・黄褐色	
5	I7−13y	口縁　深鉢	口縁部上端にヘラ状工具によるたたき目	撚り糸文　Rℓ	繊維混入・黄褐色	
6	J7−10j	口縁　深鉢	口唇部に棒状工具による刻目	羽状縄文	砂粒を多量に含有・暗褐色	
7	K7−7e	胴部　深鉢		羽状縄文	明黄褐色	
8	J7−10j	口縁　深鉢	口縁部上端に棒状工具による刻目	縄文　RL	小砂粒を多量に含有・明黄褐色	
9	I7−8w	口縁　深鉢	口唇部にヘラ状工具による刻目	縄文　LR	繊維混入・暗褐色	裏面に横ナデ調整
10	E′トレンチ	胴部　深鉢		撚り糸文　Rℓ	繊維混入・赤褐色	
11	E′トレンチ	胴部　深鉢		撚り糸文　Rℓ	繊維混入・黄褐色	
12	J7−10j	胴部　深鉢		羽状縄文	小砂粒を多量に含有・暗褐色	
13	J7−5f	胴部　深鉢		羽状縄文	小砂粒を多量に含有・明黄褐色	
14	Fトレンチ	胴部　深鉢	羽状縄文施文後，縄文を横位に押圧		繊維混入・暗褐色	

第4図 出土遺物 土器(1)



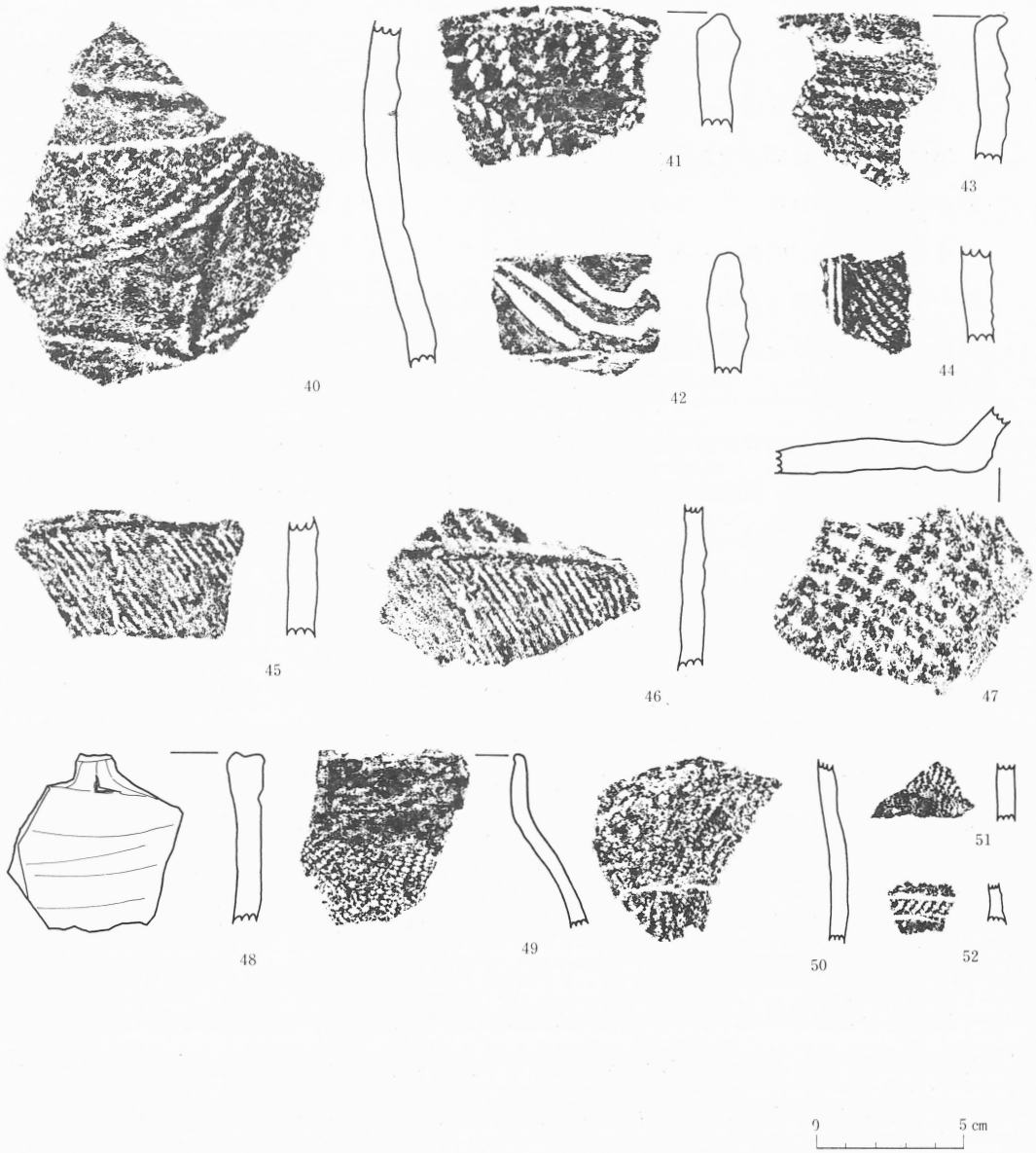
	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
15	K7－5 d	口辺部深鉢	粘土紐による区画と撚り糸の押圧		黄褐色	
16	J7－6 j	胴部深鉢		羽状縄文	繊維混入・黄褐色	
17	I7－14 x	胴部深鉢		羽状縄文	砂粒を多量に含有・赤褐色	3～4cmの条の短い原体
18	K7－10 f	胴部深鉢		羽状縄文	繊維混入・暗黄褐色	
19	K7－9 i	胴部深鉢		羽状縄文	繊維混入・黄褐色	
20	I7	胴部深鉢		羽状縄文	黒褐色	
21	J7－1 y	胴部深鉢		斜縄文 RL	繊維混入	
22	F′トレンチ	胴部深鉢		斜縄文 LR	砂粒を多量に含有・赤褐色	
23	I6－12 v	胴部深鉢		斜縄文 LR	砂粒を多量に含有・暗褐色	
24	J区表採	胴部深鉢		斜縄文 RL	繊維混入・赤褐色	
25	表採	胴部深鉢		縦位縄文 RL	繊維混入・灰白色	
26	16区	口辺部深鉢	ヘラ状工具によるツメ形文		砂粒を多量に含有・赤銅色	
27	J7－6 y	口辺部深鉢	貼りつけによる隆帯上に刻目		砂粒を多量に含有・暗褐色	
28	K7－13 f	口辺部深鉢	平行沈線の間に半竹によるC字状刺突		砂粒を多量に含有・灰白色	

第5図 出土遺物 土器②



	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
29	I 6 −12 f	口縁部　深鉢	竹管による刺突		小砂粒を多量に含有・赤褐色	
30	K 7 −10 f	口辺部　深鉢	並行沈線と粘土紐の波状の貼りつけ		小砂粒を多量に含有・赤褐色	
31	表　採	口辺部　深鉢	粘土紐の波状の貼りつけ		黄褐色	
32	J 7 −4 v	胴　部　深鉢	並行沈線による円形の区画と隆帯上に刻目		小砂粒を多量に含有・黄褐色	
33	J 7 −5 x	胴　部　深鉢	並行沈線による円形の区画と隆帯上に刻目		小砂粒を多量に含有・黄褐色	
34	表　採	胴　部　深鉢	並行沈線による連弧状の区画			
35	弥生土器表採地区	口縁部　深鉢	口唇部を肥厚させ，ヘラ状工具による沈線		小砂粒を多量に含有・暗褐色	表面にカーボン付着
36	K 7 −11 o	口縁部　深鉢	並行沈線間に終条体，棒状工具による押し引き		小砂粒を多量に含有・黄褐色	
37	K 8 −2 w	口縁部　深鉢	沈線とそれにより隆帯化した区画，並行沈線にC字状刺突		小砂粒を多量に含有・黒褐色	
38	J 7 −15 u	口縁部　深鉢	隆帯による渦巻状の貼りつけ		小砂粒を多量に含有・黄褐色	
39	K区	口縁部(把手)浅鉢	隆帯により区画の後，沈線による施文，内面に沈線がめぐる		黄褐色	

第6図 出土遺物 土器(3)



	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
40	K7—12c	胴部 深鉢	細い隆帯と縄文押圧による円形状の区画	無文	砂粒を多量に含有・暗黄褐色	
41	K7—25e	口縁 深鉢	口唇部を肥厚させ，RLの縄文を押圧		小砂粒を多量に含有・赤褐色	
42	K7—1i	口縁 深鉢	口唇部を外側にかえし，RL縄文を横位に押圧		小砂粒を多量に含有・	
43	弥生出土区	口縁 深鉢	口縁部に棒状工具による渦巻状の沈線		小砂粒を多量に含有・灰白色	
44	弥生出土区	胴部 深鉢	並行沈線による区画	縄文 LR	小砂粒を多量に含有・黄褐色	
45	M′トレンチ	胴部 深鉢	細い隆帯による区画，綾絡文垂下	撚り糸	小砂粒を多量に含有・黄褐色	No46と同一個体
46	M′トレンチ	胴部 深鉢	細い隆帯による区画，綾絡文垂下	撚り糸	小砂粒を多量に含有・黄褐色	No45と同一個体
47	K7区	底部 深鉢	格子文		小砂粒を多量に含有・暗黄褐色	
48	K7—5b	口縁(小突起)		無文		
49	弥生出土区	口縁 壺	口縁部に無文帯，胴部に縄文		小砂粒を含有・暗黄褐色	
50	弥生出土区	胴部 壺		縄文	小砂粒を含有・暗黄褐色	
51	弥生出土区	胴部		縄文	小砂粒を含有・暗黄褐色	
52	弥生出土区	胴部	帯縄文		小砂粒を含有・暗黄褐色	

第7図 出土遺物 土器(3)

③ 石　　器

a．石鏃（第８図１～19）

出土した石鏃は35点であり，そのうち完形品は20点である。石材は19をのぞいて，すべて頁岩が用いられている。１～３は直線的な側縁をもち，平坦な尖端をもつ短冊型のものであるが３は基部の側縁に両側から浅い抉りが入れられている。４～９は，尖端部から基部にかけた側縁の変換点が明瞭なもので，平坦な基部をもつものである。10は，傾斜の変換点がゆるやかで，基部の側縁に抉りを入れて凸状の茎をつくりだしているものである。11，12は，側縁部の基部に近い部分が強くふくらんでいるもので，平坦な基部をもっている。13，14は，側縁部の中央または基部に近い部分がふくらんでいるもので，基部に深い抉りを入れてU字状の凹みをもつものである。15は，直線的な側縁をもち，基部の側縁に深い抉りを入れて凸状の茎を作りだしているものである。16～19は，側縁部の中央または基部に近い部分がふくらんでいるもので，石鏃としては比較的大型のものである。

b．石槍（第８図20～25，第11図55）

出土した石槍は32点で，そのうち完成品は12点である。石材についてはほとんどが頁岩を用いている。20は，直線的な側縁をもち，尖端の型状もゆるやかなふくらみをもっている。21～23は，尖端部から基部にかけた側縁の変換点が明瞭なもので，側縁部の基部に近い部分が強くふくらんでいる。24は，側縁部が強くふくらんでいるもので，裏面は側縁にのみ加工が施されている。25は，尖端部を欠いているものの，いわゆる木葉型になるとおもわれるものである。11図55は，最大長163㎜と大型のもので，両面に剝離調整が施されている。

c．石篦（第９図26～30）

出土した石篦は22点で，そのうち完成品は15点である。石材については，ほとんどが頁岩を用いている。26，27は，楕円形を基本とする平面形をもつもので，基部から刃部にかけた側縁がゆるやかにふくらんでいる。出土した石篦のほとんどがこの中に含まれる。28～30は，長方形を基本とする平面形をもつものである。これらの石器はいずれも，最大幅のある位置に急斜度の刃部を作りだしており，刃部には幅の狭い細い剝離調整が施されている。また片面には，ほぼ全面に剝離調整が施されるが，反対側の面には側縁部に調整が施されているだけで，平坦に近い。このため断面形はいずれもかまぼこ型を呈している。

d．石匙（第９図31～36，第10図37，38）

出土した石匙は37点で，そのうち完形品は20点である。石材については，ほとんどが頁岩を用いている。石匙はその形態的特徴から，Ⅰ類：横長型（31）Ⅱ類：縦長型（33，36，37，38）Ⅲ類：三角形型（32，34，35）に大きく分けられた。出土点数では，Ⅰ類が１点，Ⅱ類が31点，Ⅲ類が５点であり，Ⅱ類の占める割合が多い。これらの石器はいずれも，両側辺から抉りを入

れて作りだされたつまみをもち，片面にはほぼ全面に剝離調整が施されているが，反対側の面には側縁部にかけて調整が施されているだけで，断面形は三角形状を呈するものが多い。32は，一度刃部を欠損したものを再調整して使用されたとおもわれる。

e．スクレイパー（第10図39～41）

剝片の側辺や末端に，細かな剝離調整を施してつくられた刃部をもつものをスクレイパーとした。出土したスクレイパーは25点である。39，40は，側縁に片面加工によって刃部をつくりだしている。41は，剝離調整による刃部はもっていないが，側縁部にかけて使用痕がみとめられるものである。

f．石錘（第10図42）

偏平な石の両端に，抉りを入れたもので，1点しか出土していない。

g．凹石（第10図43～45）

出土した凹石は3点で，他に磨石が20点出土している。平面形には，楕円形を基本とするもの（43，44）と，棒状になるもの（45）がある。3点とも両面に凹部をもっているが，45のように，両面ともに縦一列で，5～6個の凹部をもつものがある。

h．石核（第10図46）

加撃面は2ケ所認められ，大きく自然面をとり去り，加撃面を作りだしている。

i．打製石斧（第11図47～50，52～54）

出土した打製石斧は16点であり，そのうち完形品は10点である。47～49のような小型のものと，50，52～54のような大型のものとにわけられるが，いずれも素材に粗い剝離調整を施して成形している。54は，刃部が基部よりも僅かに幅が広くつくられているが，全体としては知冊型に近い形態で，刃部は刃縁が丸くつくられている円刃である。52は，肉厚の素材を用いており，断面形はレンズ状を呈している。

j．磨製石斧（第11図51）

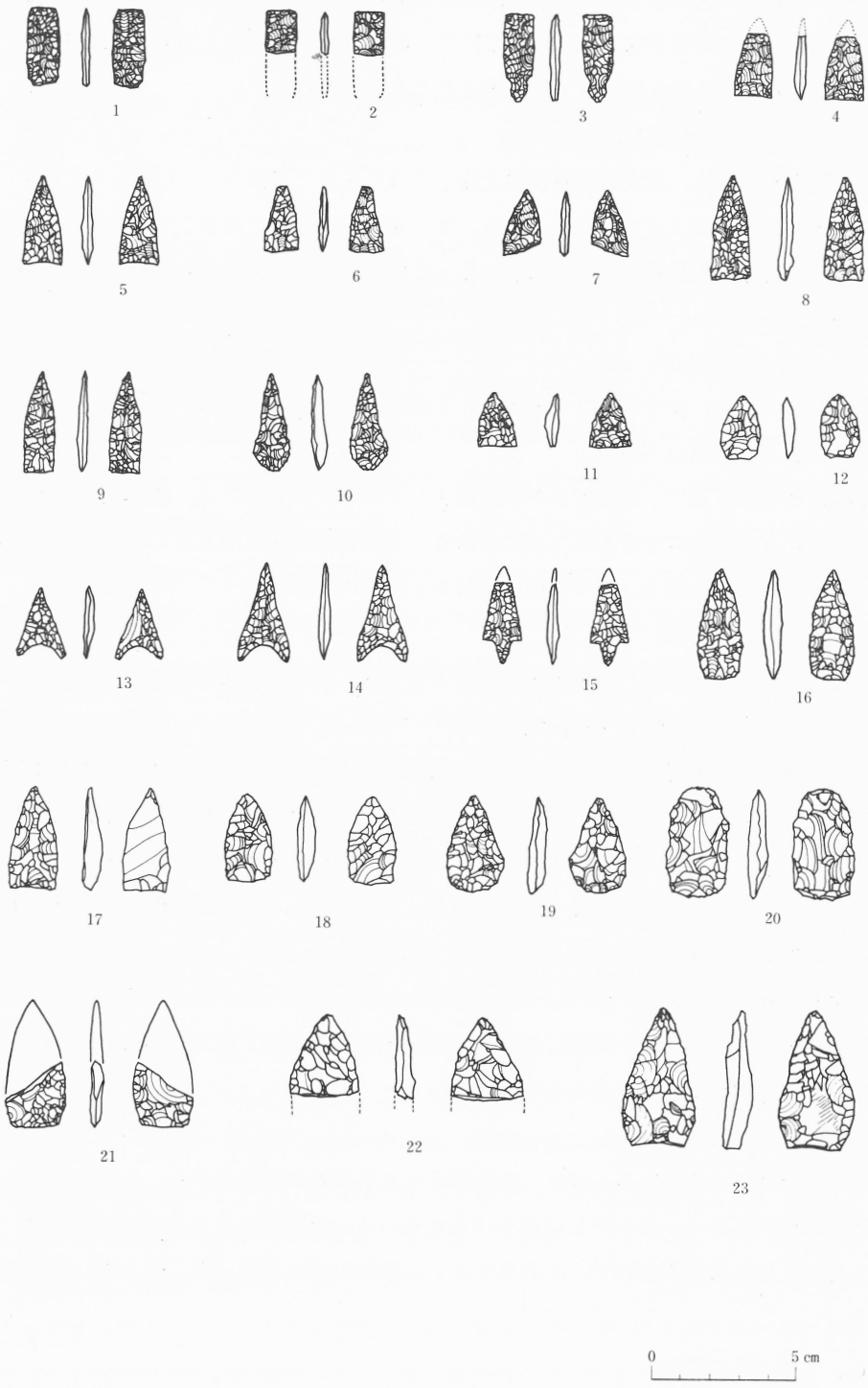
51は刃部を欠いているが，刃部にむかって幅が広くつくられており，断面形は楕円形を呈している。磨製石斧は1点しか出土していない。

k．石皿（第12図57，58）

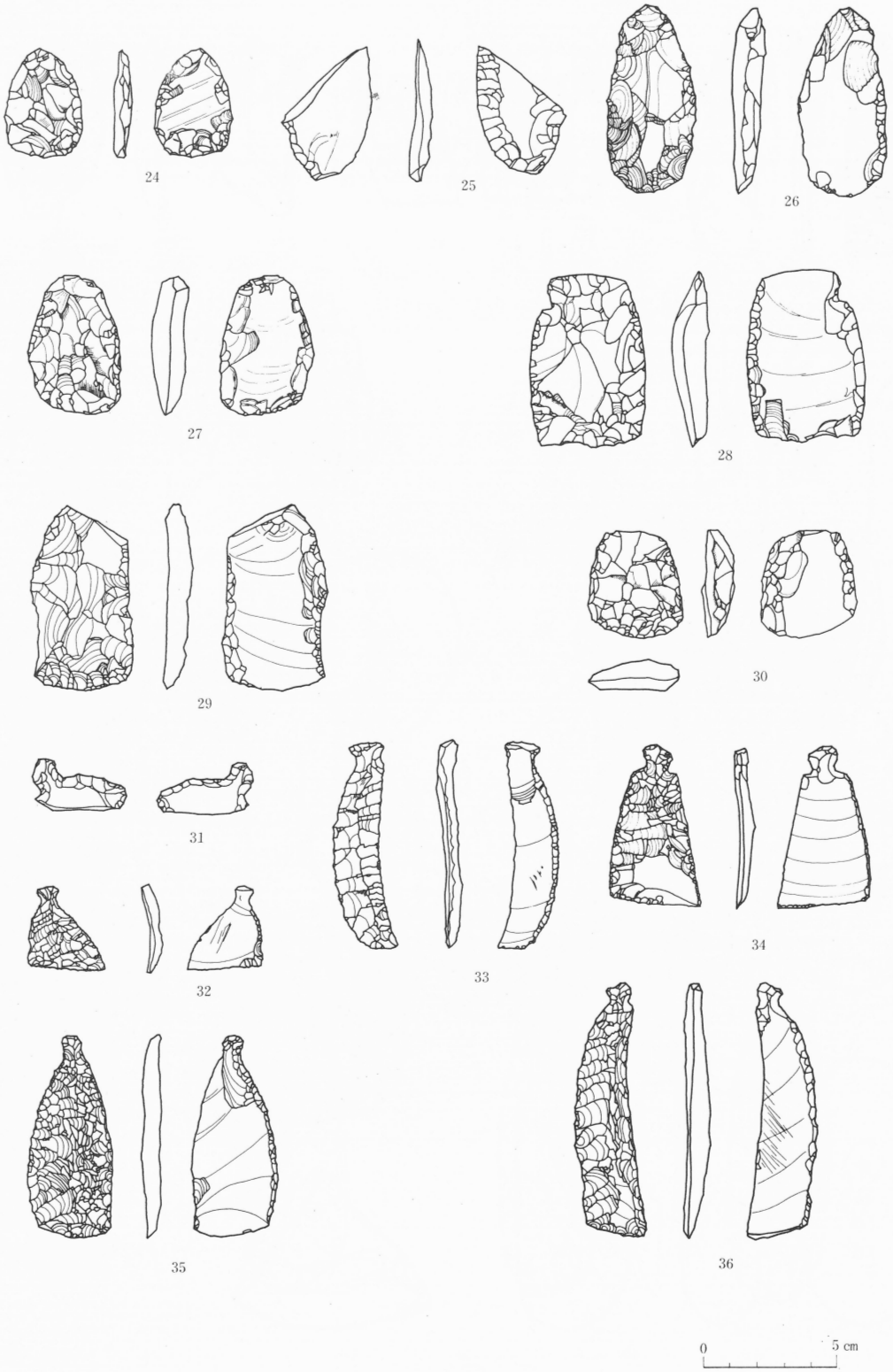
出土した石皿は7点である。57は，中央部に大きな皿状の凹みがあり，その中にさらに浅い凹みが4ケ所みられる。掻きだし口がつけられている。底面が丸みをおびているため，すわりがよくない。58は大型のもので，すわりもよい。皿状の凹みは浅いが，掻きだし口がつけられている。ている。

l．石棒（第12図56）

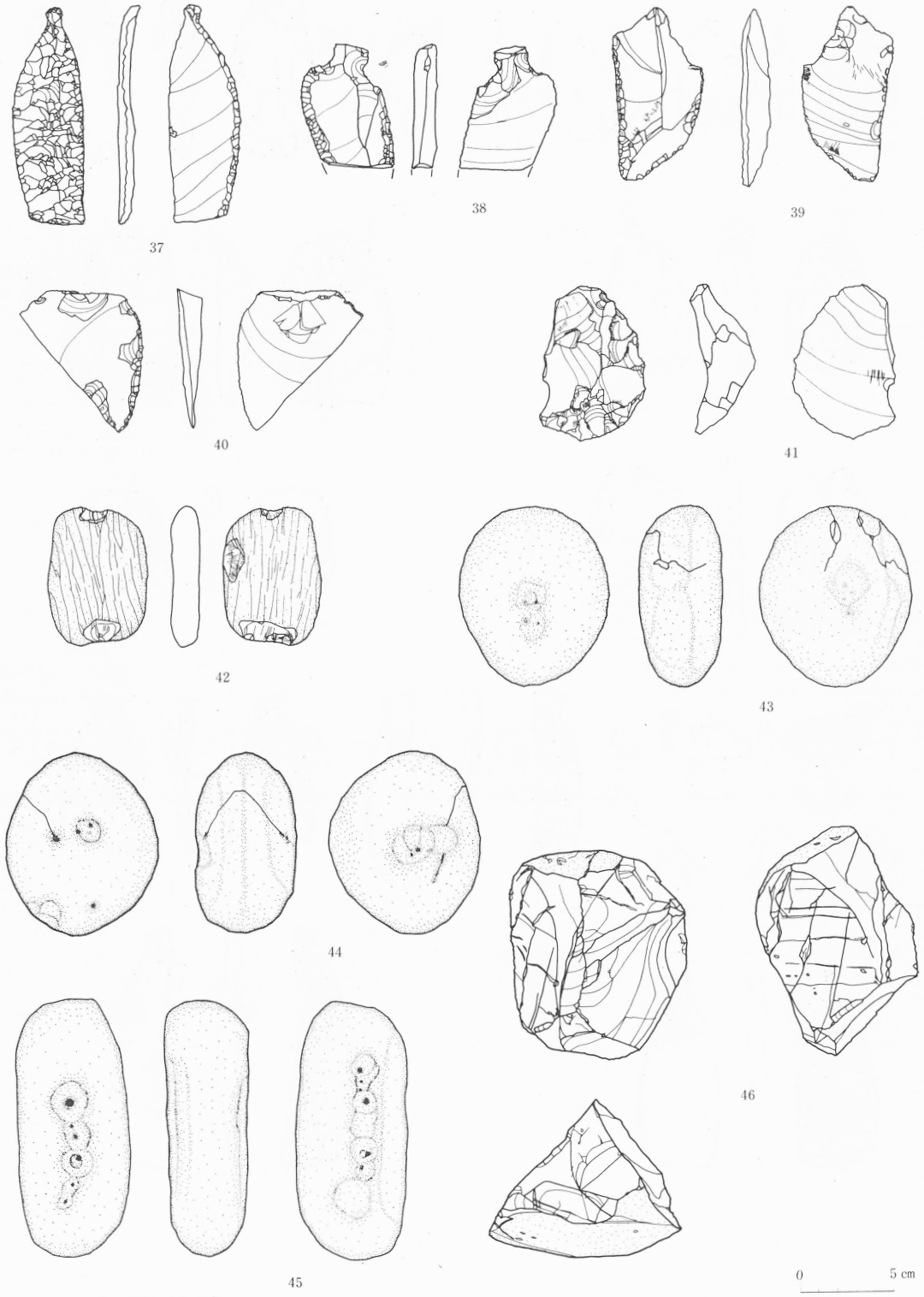
k7区Ⅲ層中で出土したもので，長さ56cm，根元の太さ径14cmと大型の石棒で，表面調整のためとおもわれる磨痕が全面にみられ，断面形はふくらんだ三角形状を呈している。



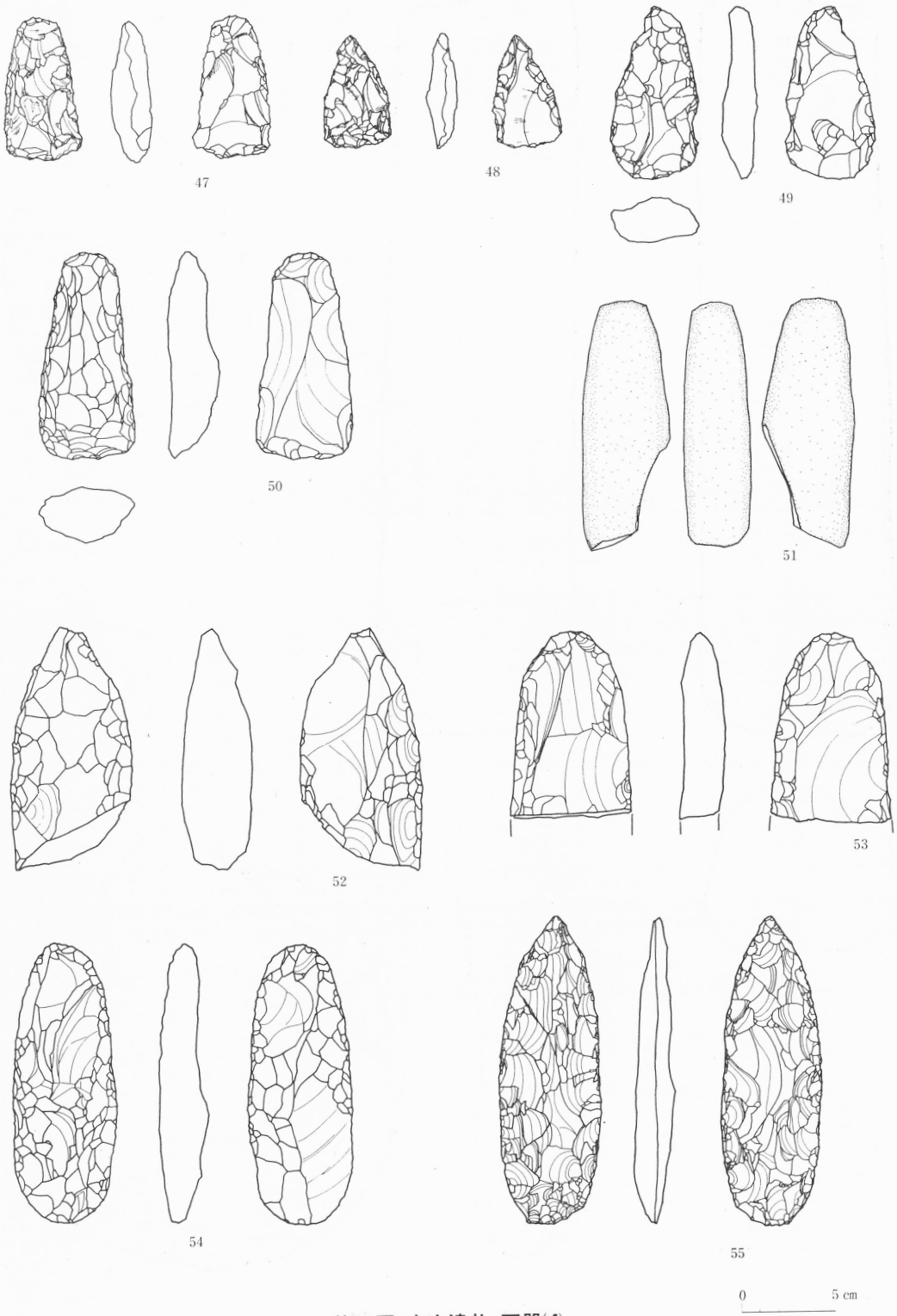
第８図 出土遺物 石器(1)



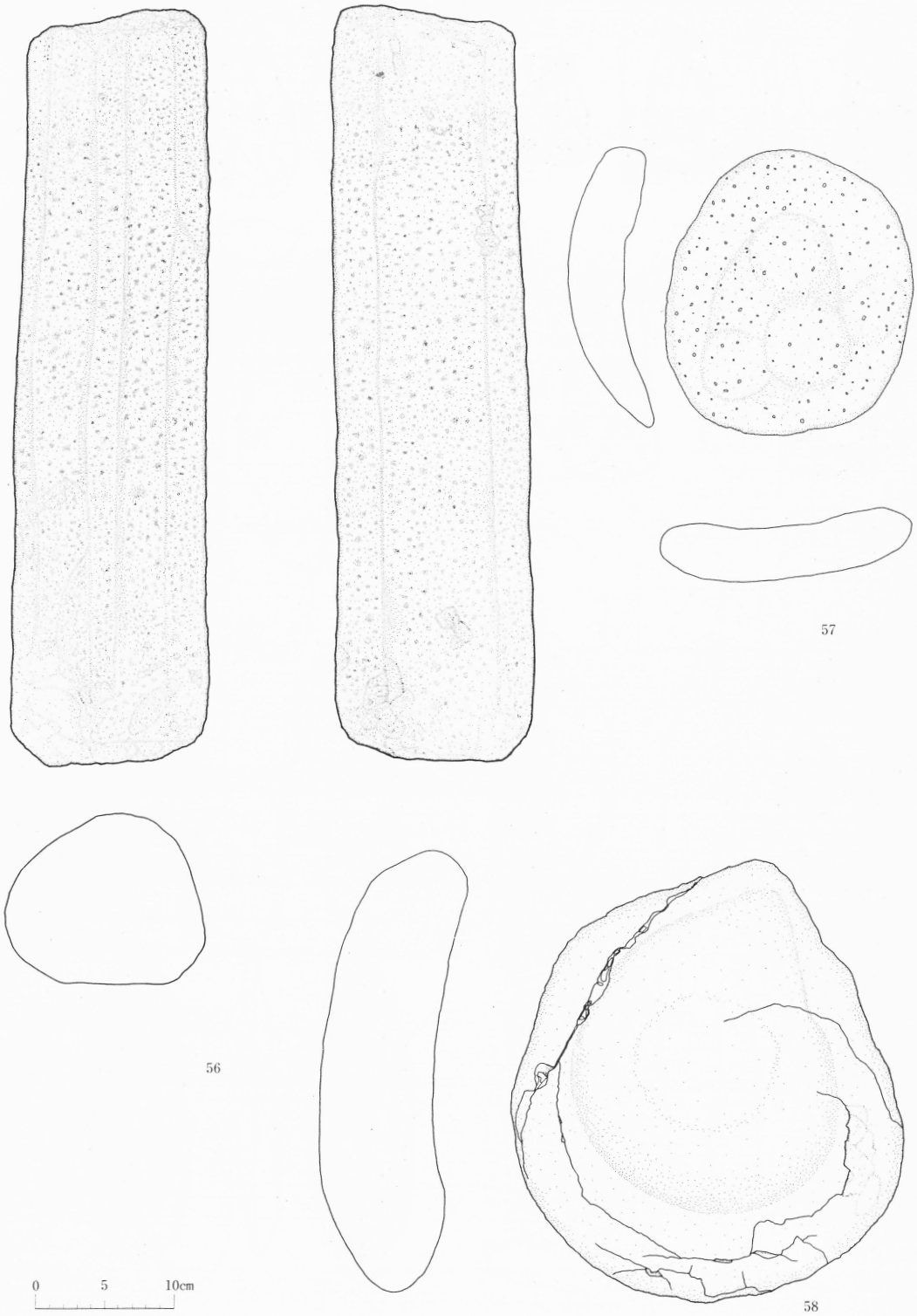
第９図 出土遺物 石器(2)



第10図 出土遺物 石器(3)



第11図 出土遺物 石器(4)



第12図 出土遺物 石器(5)

	形　態	地区・層位	長さ(mm)	幅　(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	備　考
1	石　鏃	F4区表採	26.5	11.0	2.5	0.0.25	頁　岩	
2	〃	9区表採	14.5	10.5	2.0	0.0.25	〃	欠　損
3	〃	K7－21d	30.0	10.0	2.0	0.0.75	〃	
4	〃	表　採	21.5	13.0	4.0	0.0.25	〃	欠　損
5	〃	表　採	30.5	13.0	3.0	0.0.25	〃	
6	〃	M9区表採	22.5	12.0	3.0	0.25	〃	欠　損
7	〃	No 2 Grid	23.0	12.0	3.0	0.25	〃	欠　損
8	〃	F4区	35.0	13.0	5.0	1.0	〃	
9	〃	J7区	35.0	10.0	2.5	1.0	〃	
10	〃	K7－5h	33.5	12.0	5.0	1.5	〃	
11	〃	K7－2e	19.0	14.0	4.0	0.5	〃	
12	〃	J7	22.0	13.0	3.5	2.5	〃	
13	〃	J7－15i	24.0	16.5	3.0	0.25	〃	
14	〃	K7－18q	34.0	12.0	4.0	0.5	〃	
15	〃	表　採	27.5	12.5	3.0	0.25	〃	欠　損
16	〃	I6区	38.0	14.0	6.0	2.5	〃	
17	〃	I6－17y	35.0	11.5	5.0	2.5	〃	
18	〃	J7－4e	30.0	16.0	6.0	1.0	〃	
19	〃	K7区	33.0	19.5	5.5	1.0	珪化凝灰岩	
20	石　槍	H6区	37.0	21.0	6.0	2.5	頁　岩	
21	〃	E′トレンチ	21.5	21.0	3.5	1.0	〃	欠　損
22	〃	J7区	27.5	24.0	6.0	2.0	〃	欠　損
23	〃	J7区	47.0	25.0	8.0	10.0	珪化凝灰岩	
24	〃	K7区	40.0	29.0	6.0	7.5	頁　岩	
25	〃	K7区	50.5	32.0	5.0	7.5	〃	欠　損
26	石　篦	J7区	69.0	33.5	11.0	27.5	〃	
27	〃	L7区	51.5	34.0	12.0	25.0	〃	
28	〃	No 3 Grid	65.0	43.0	12.0	37.5	〃	
29	〃	J7－8i	68.0	37.0	7.0	26.0	〃	
30	〃	G4区表採	39.5	35.0	9.5	16.0	珪化凝灰岩	
31	石　匙	N9区表採	35.0	19.0	4.5	2.5	頁　岩	横型，欠損
32	〃	K7－19b	30.0	29.0	5.0	2.0	〃	再調整
33	〃	I6－25x	77.0	16.0	5.0	7.5	〃	
34	〃	G5区表採	59.5	35.0	4.5	11.0	〃	
35	〃	表　採	74.0	31.5	6.5	16.0	〃	
36	〃	H5区	95.0	22.0	7.0	17.5	〃	
37	〃	J7区	114.0	37.0	7.5	36.0	〃	
38	〃	K7－1e	68.0	43.0	11.0	36.0	〃	欠　損
39	スクレイパー	K7－10q	91.5	48.0	14.5	47.5	〃	
40	〃	M′トレンチ	74.0	67.0	10.5	45.0	〃	
41	〃	K7－12m	82.0	55.0	21.0	97.5	〃	
42	石　錘	I7区	73.0	52.0	14.0	82.5	砂　岩	
43	凹　石	表　採	95.0	79.0	49.0	600.0	石英安山岩質凝灰岩	
44	〃	K7－21k	97.0	80.0	52.0	440.0	〃	
45	〃	K8－3t	135.0	58.0	43.0	580.0	石英安山岩	
46	コ　ア	H6区	107.0	96.0	80.0	1000.0	石英安山岩質凝灰岩(珪化)	
47	打　斧	No 7 Grid	75.0	41.0	20.0	67.5	凝　灰　岩	
48	〃	K7－1d	58.0	35.0	12.0	22.5	珪化凝灰岩	
49	磨　斧	J7－11y	132.0	46.5	36.0	350.0	凝灰質砂岩	欠　損
50	打　斧	表　採	91.5	47.5	18.0	80.0	珪化凝灰岩	
51	〃	表　採	108.0	50.0	26.0	155.0	凝灰岩質粘板岩	
52	〃	H6区	128.0	64.0	35.0	341.0	凝　灰　岩	欠　損
53	〃	弥生土器表採地区	98.0	65.0	22.0	212.5	砂　　岩	欠　損
54	〃	K7－4c	147.0	54.0	25.0	225.0	砂　　岩	
55	石　槍	H6区	163.0	54.0	18.0	177.5	頁　　岩	
56	石　棒	K7区	560.0	140.0	120.0	14.4kg	砂　　岩	
57	石　皿	表　採	200.0	175.0	38.0	2.4kg		
58	石　皿	M9区	297.0	266.0	80.0	11.6kg		
59								
60								

石　器　計　測　表

V　ま　と　め

1.　蒲沢山遺跡は，七北田・国見丘陵南西端，赤坂川左岸に位置している。

2.　発見された遺構としては，竪穴住居址13軒，土壙およびピット70基，赤坂川沿の製鉄遺構がある。

3.　発見された遺物としては，縄文土器，弥生土器・石器がある。縄文土器は早期末葉から中期末葉にかけてのもので，早期末葉～前期初頭のものが主体である。弥生土器については時期を特定することはできなかった。

石器は，石鏃・石槍・石匙等の剝片石器と，磨石・凹石等の礫石器・磨製石斧・石皿・石棒がある。

4.　遺構の年代は，竪穴住居址および土壙，ピットとも縄文時代早期末葉から前期初頭のものとおもわれる。製鉄遺構については年代を特定できなかった。

〔引　用　参　考　文　献〕

宮城県教育委員会（1969）「南境貝塚―埋蔵文化財第４次緊急調査概報」宮城県文化財報告書第20集

〃　（1977）「亀岡遺跡・金山貝塚」宮城県鳴瀬町文化財報告書第１集

〃　（1978）「東北自動車道遺跡報告書Ⅰ―上深沢遺跡―」宮城県文化財報告書第52集

〃　（1981）「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財報告書第73集

〃　（1981）「宮城県遺跡地図」宮城県文化財報告書第74集

〃　（1982）「天神山遺跡」宮城県文化財調査報告書第89集

〃　（1982）「東北自動車道遺跡報告書Ⅵ―勝負沢遺跡―」宮城県文化財報告書第83集

〃　（1983）「大倉遺跡，原尻遺跡」七ケ宿ダム関連現地説明会資料

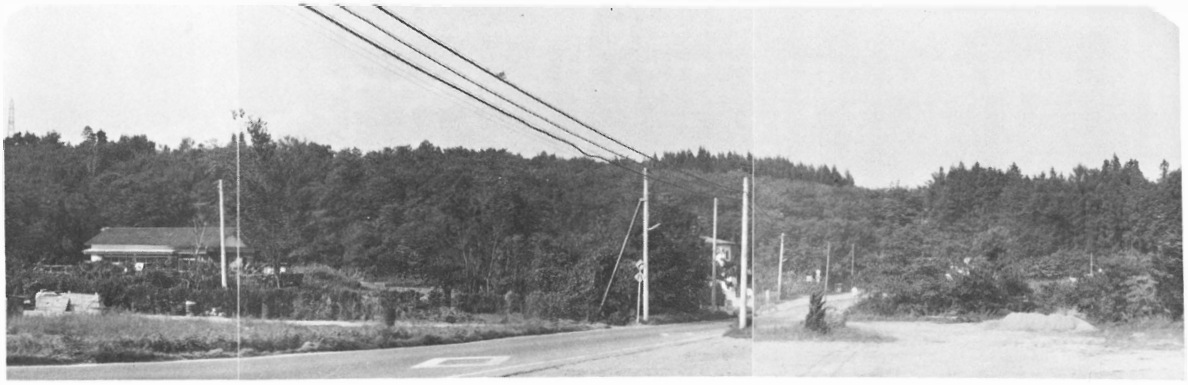
仙台市教育委員会（1980）「三神峯遺跡」仙台市文化財報告書第25集

〃　（1981）「六反田遺跡」仙台市文化財報告書第34集

〃　（1983）「茂庭」仙台市文化財報告書第45集

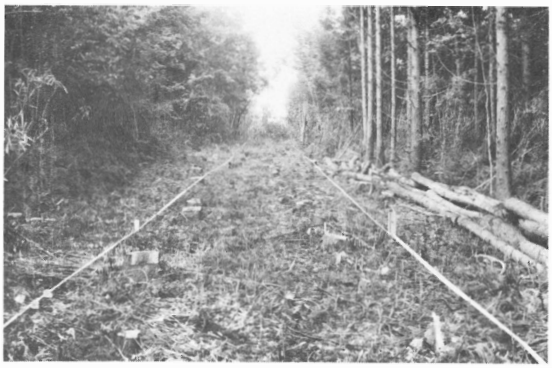
伊東信雄（1940）「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第２集

林　謙作（1965）「縄文文化の発展と地域性―東北―」「日本の考古学Ⅱ」河出書房

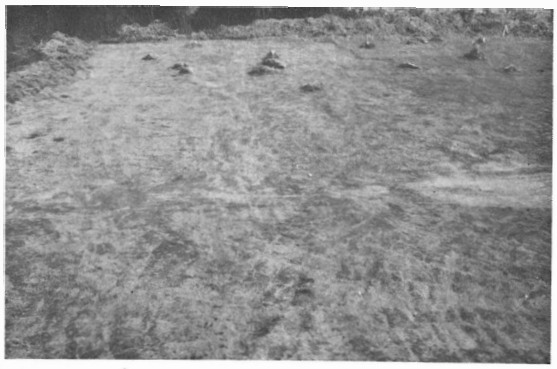


蒲沢山遺跡遠景

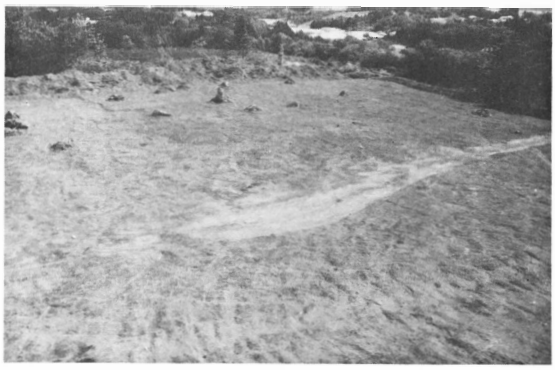
中央区伐採状況



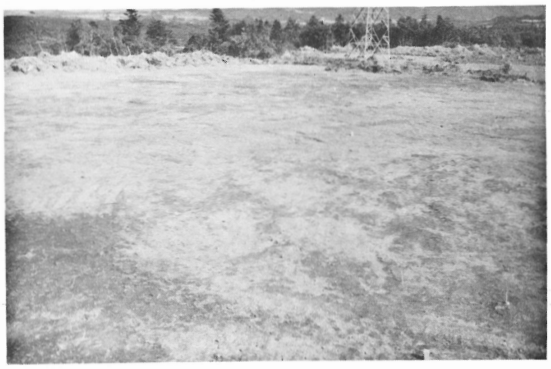
E′トレンチ伐採状況



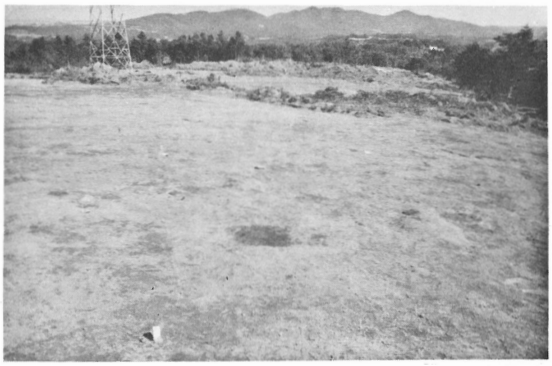
中央区北東部



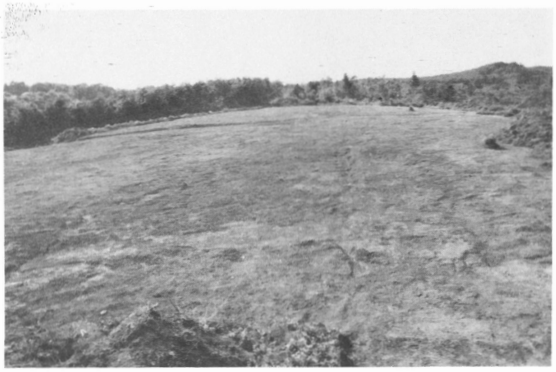
中央区南東部



中央区北西部



中央区南西部

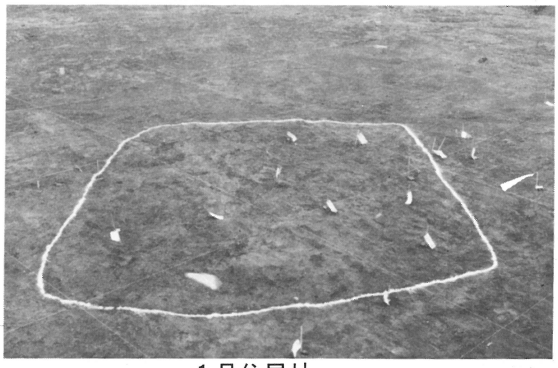


中央区西方向

遺構検出作業（2・3住）

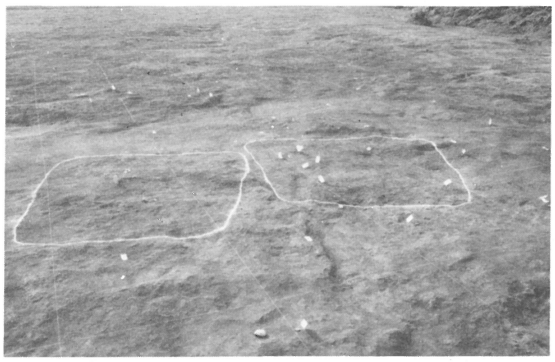
製　鉄　址

水　路　跡

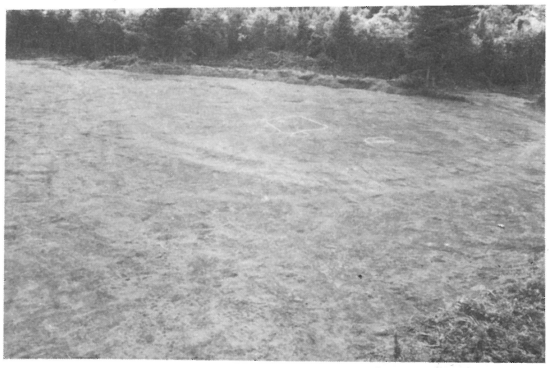


1号住居址

2号・3号・4号住居址

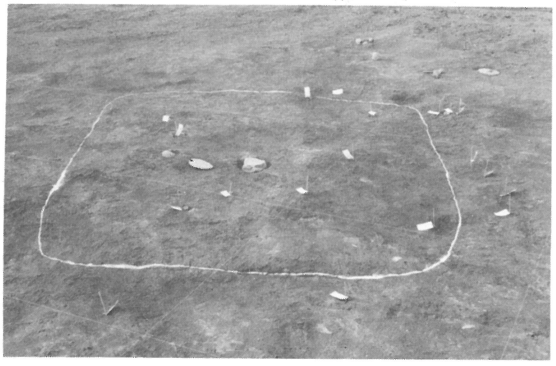


2号・3号住居址

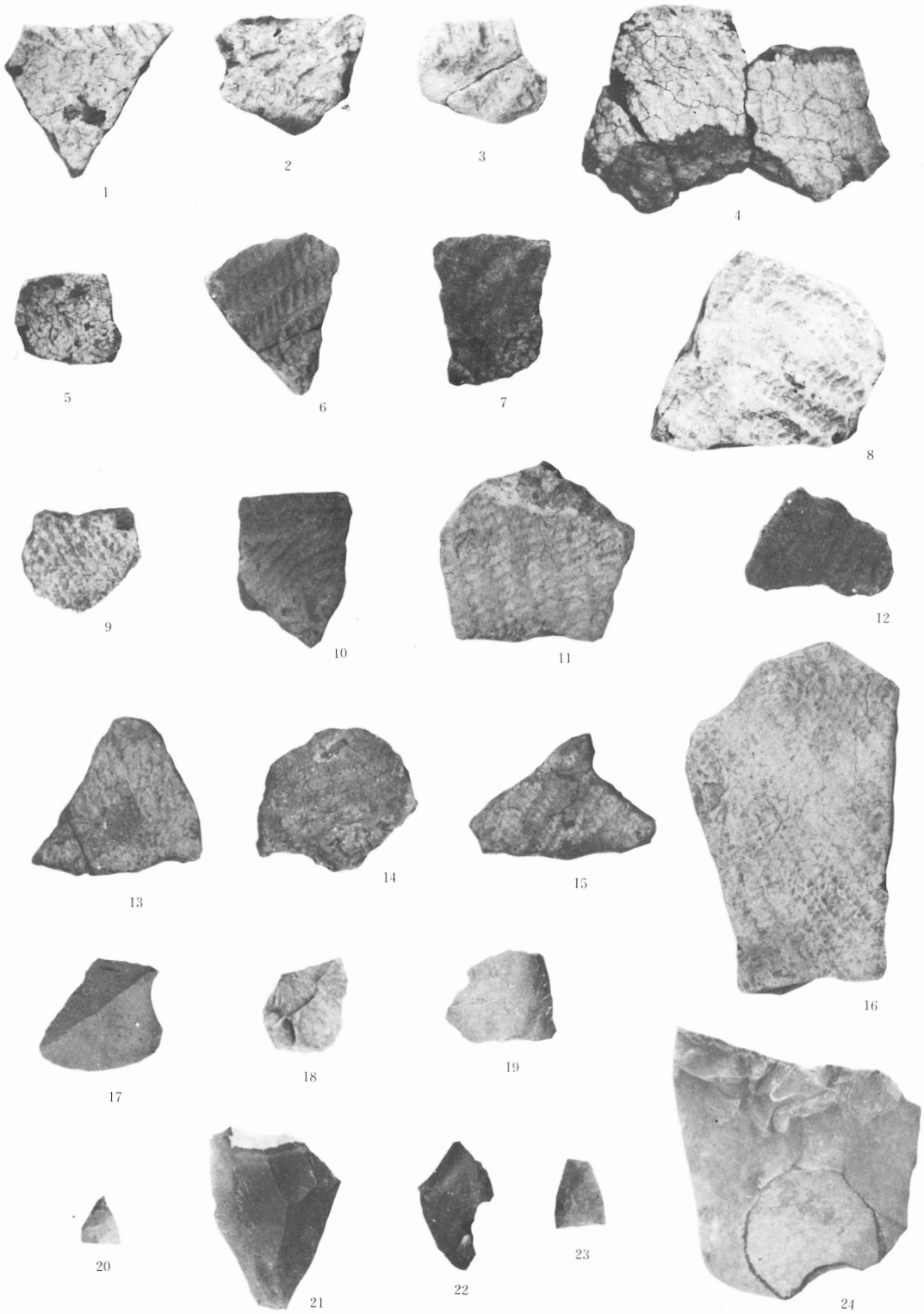


中央区東部（5号住居址）

5号住居址



7号住居址

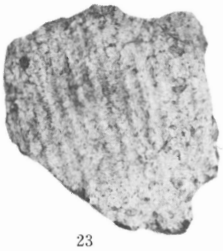


住居址出土遺物

出土遺物 拓本土器(1)

21

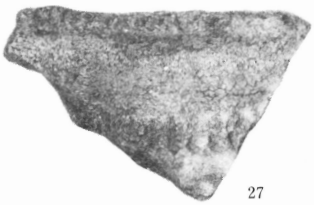
22


23

24

25

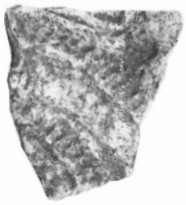
26

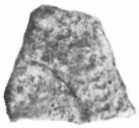

27

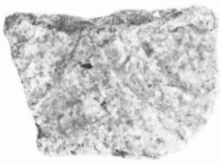
28

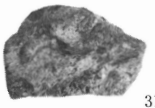
29

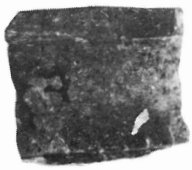
30


32


33


34

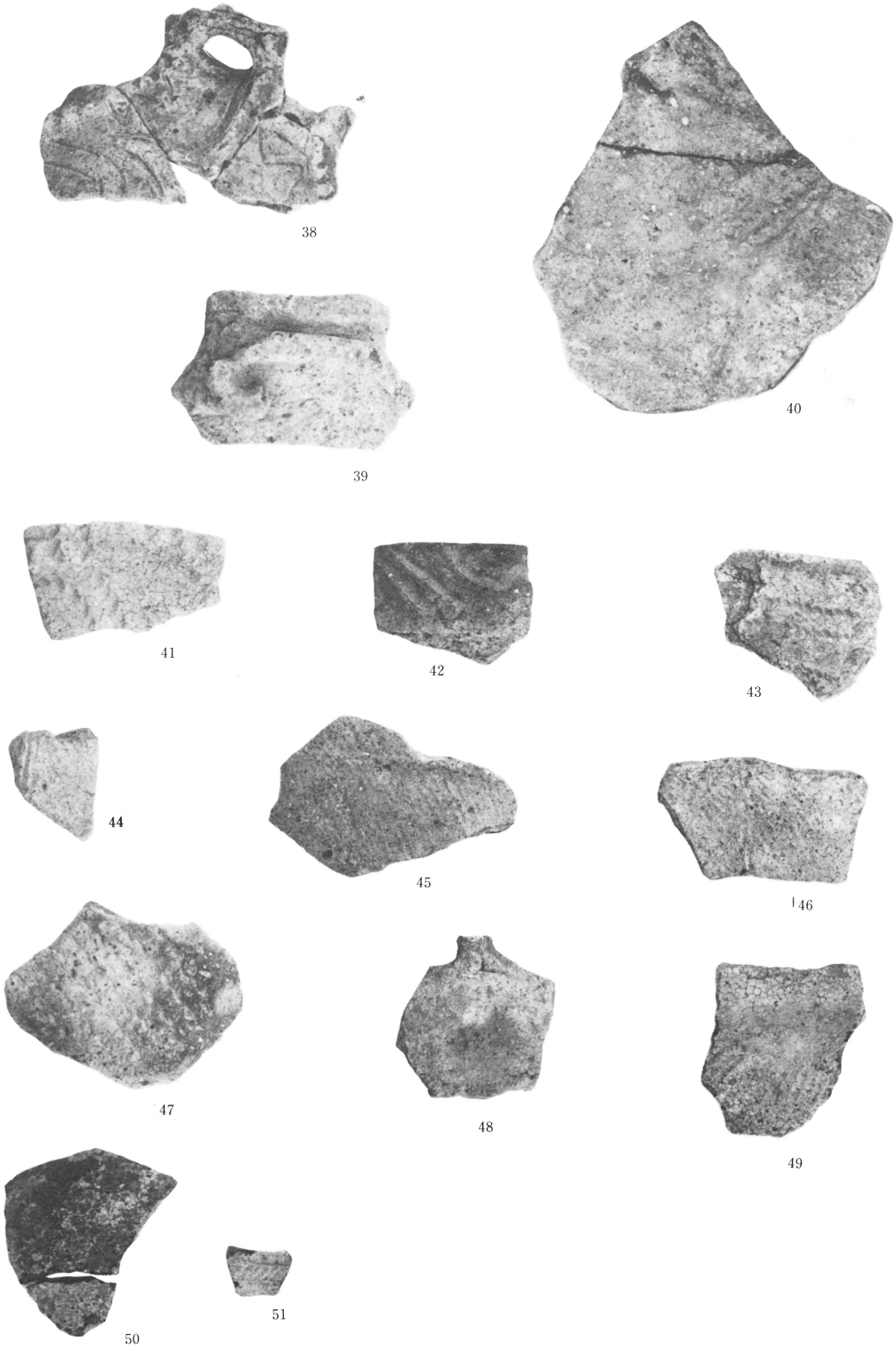

31


35

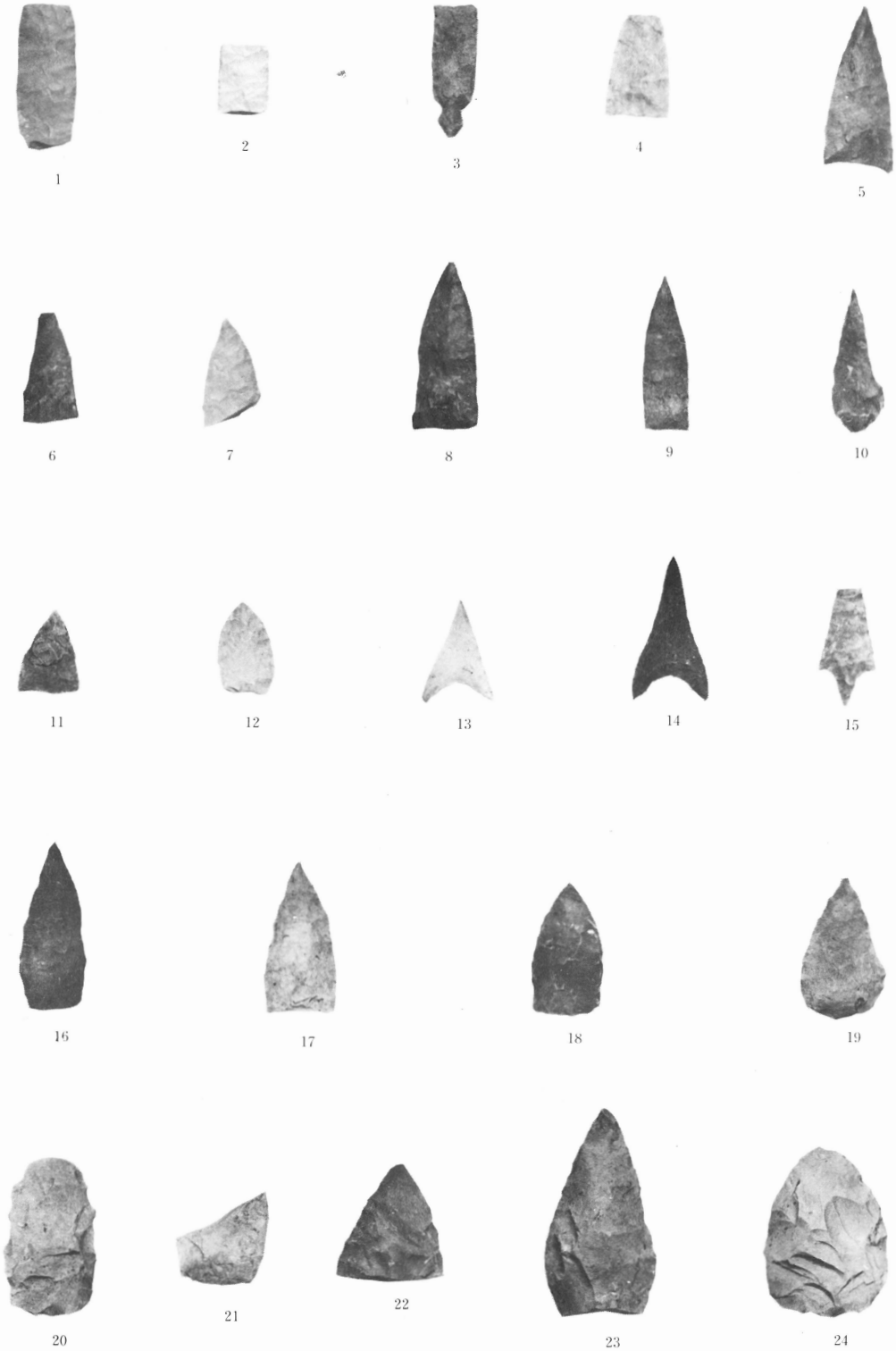
36

37

出土遺物 拓本土器(2)



出土遺物 拓本土器(3)



出土遺物 石器(1)

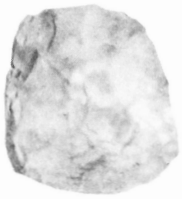
25

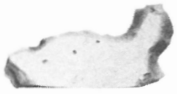
26

27

28

29


30


31

32

33

34

35

出土遺物 石器(2)

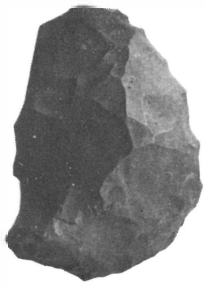
36

37

38

39

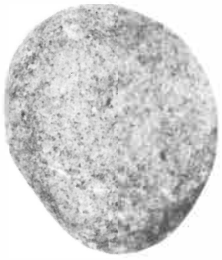
40



41

42

43



44

45

出土遺物 石器(3)

46

47

48

49

50

51

52

55

56

53

54

57

58

出土遺物 石器(4)

宮城町教育委員会社会教育課職員一覧

教育長	田中勝三
教育次長	桜井辰祥
社会教育課長	中野博
社会教育課長補佐	田副恒徳
主事	原河英二
主事	早坂真由美
社会教育主事	庄子俊夫
社会教育指導員	工藤信一郎

宮城町文化財調査報告書第4集

蒲沢山遺跡

―遺跡詳細分布調査報告書―

昭和59年3月10日　印刷
昭和59年3月22日　発行

発行　**宮城町教育委員会**
宮城郡宮城町下愛子字観音堂5
電話（02239）2―2111番

印刷　株式会社　**セイトウ社**
仙台市国分町二丁目3―13
電話（0222）22―6595番㈹